Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-19

Tolerance of Ambiguity 概念の再考と曖昧な場面における行動との関連　ー異文化接触場面を中心としてー

米田，晃久

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2012-03-25
(Date of Publication)
2014-02-03
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲5544
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005544

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博士論文

Tolerance of Ambiguity 概念の再考と曖昧な場面における行動との関連

－異文化接触場面を中心として－

平成 24 年 1 月

神戸大学大学院国際文化学研究科

米田　晃久

博士論文

Tolerance of Ambiguity 概念の再考と曖昧な場面における行動との関連
－異文化接触場面を中心として－

審査委員：　宇津木　成介　教授
米谷　　淳　教授
水野　マリ子　教授

平成 24 年 1 月

神戸大学大学院国際文化学研究科

米田　晃久

Tolerance of Ambiguity 概念の再考と曖昧な場面における行動との関連

－異文化接触場面を中心として－

所属専攻・コース　：グローバル文化専攻・感性コミュニケーションコース
氏　　名　：米　田　晃　久
指導教員氏名　：宇津木成介教授

＜要旨＞

本研究の目的は，①Tolerance of Ambiguity（以下，AT）概念の再考を行い，AT の多次元構造を明らかにすることである。②その上で，典型的な曖昧な場面として，異文化接触を選び，日本人大学生の異文化接触時の行動と AT との関連を明らかにすることである。③また，主観的なレベルの曖昧さではなく，客観的に曖昧な場面である確率情報を用いた選択場面を設定し，曖昧さを嫌い避ける現象である「曖昧性忌避」と AT との関連を明らかにする。①②③を通じ，AT の心理学的研究を行う。

第 1 章では曖昧さ概念について検討する。心理学では曖昧さに対する反応の個人差を AT という概念で捉えてきた。Frenkel-Brunswik(1949)は，曖昧さに intolerant な者は価値判断の局面において，しばしば，現実を無視し，白か黒かをはっきりさせようとしたり，早急な結論に達する傾向，また他者に対し無条件の全面的な承認や拒絶を求める傾向があるとした。Frenkel-Brunswik が AT を概念化してから，半世紀の間に多くの研究者が AT の概念を用いた研究を行ってきた。AT とエスノセントリズムや権威主義的パーソナリティとの関連(Furnham & Ribchester,1995)，AT がストレスの評価に及ぼす影響(増田, 1998)，AT がストレスコーピングに与える影響（友野・橋本,2002)，AT と強迫傾向や抑うつ傾向との関連（西村,2007）等が示されてきた。AT 概念を使用した研究は，臨床心理学，産業・組織心理学，医学や教育学，起業家精神との関わり等，多岐に及んでいる(Bors, Gruman & Shukla, 2010)。

しかしながら，AT 概念の問題点も指摘されている。西村（2007）は，これまでの AT 研究の多くが，曖昧さへの耐性の低さという否定的な側面に焦点が向けられ，肯定的な態度についての検討が不十分だと指摘している。また，Furnham(1994）は先行研究において使用されてきた AT 測定尺度は一次元構造を想定して作成されているが，分析の結果，それらの尺度が多次元構造であることを指摘している。AT 研究を進める上で，AT の多次元構造を明らかにする必要がある。既存の AT 測定尺度が AT のどのような側面を測定しているのかを明らかにすることで，AT と他のパーソナリティ特性や行動との関連を詳細に検討することができる。

第 2 章では，本研究で使用する AT 測定尺度の友野・橋本(2005)の「改訂版対人場面に

おけるあいまいさへの非寛容尺度:以下 IIAS-R」と西村（2007）の「曖昧さへの態度尺度:以下 ATAS」を同時に実施し，相関分析，因子分析を行い，次元構造の検討，加えて IIAS-R と ATAS の両者の測定する AT の違いを検討した。

相関分析から，IIAS-R は曖昧さへの Intolerance を測定するが Tolerance を測定するものではないことがわかった。因子分析において IIAS-R は多次元構造を示した。これは新奇性や複雑性といった曖昧さの質の違いにより因子構造が明瞭に分かれたと考えられる。また，両尺度のすべての項目で因子分析を行った結果，ATAS と，IIAS-R とは因子構造が異なることが示唆された。このような因子構造の違いは，場面限定をせず一般的な観点から作成された AT 測定尺度(ATAS)が，場面状況によっては，AT を測定する尺度として適合しないことを示している。また，場面を対人場面に限定して作成された AT 測定尺度(IIAS-R)で測定された AT を，曖昧な場面を限定していない ATAS で測定された AT と同一視することの危険性を示している。

第 3 章では，日本人学生が遭遇する場面のうち，曖昧さが高いと考えられる日本人大学生の異文化接触場面を選び，日本人大学生の留学生との接触時の行動と，ATAS，IIAS-R で測定した AT との関連を検討した。同時に過去の異文化滞在経験や留学生交流サークルの所属の有無により AT にどのような違いがあるか検討した。一連の分析において，有意な差が見られた ATAS，IIAS-R の下位尺度は ATAS の「曖昧さへの不安」，IIAS-R の「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」,「友人関係における曖昧さへの非寛容」であった。曖昧さをポジティブにとらえる傾向である ATAS の「曖昧さの享受」や「曖昧さの受容」はいずれの群間においても有意な差が見られなかった。つまり，曖昧さに intolerant であることは，異文化接触行動の抑制要因にはなるが，曖昧さに tolerant であることは，異文化接触行動の促進要因とはなっていないことが示唆された。

第 4 章では，客観的に曖昧さが定義できる場面として，確率情報を用いたエルスバーグの壺と呼ばれる選択課題を使用した。エルスバーグの壺課題においては，多くの人が曖昧性を嫌い避ける「曖昧忌避」と呼ばれる現象が起きる。そこで，曖昧性忌避と AT の関連を検討するために，4 種類のエルスバーグの壺課題と ATAS，IIAS-R を日本人大学生に同時に実施した。相関分析から，曖昧さの程度が高い問題において，曖昧性忌避の有無と「曖昧さへの不安」，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」，「友人関係における曖昧さへの非寛容」との間に有意な正の相関が示された。また，「曖昧さの受容」が高い者は，各選択肢に出す参加費の差が大きいことが示された。結果から AT のネガティブな側面が曖昧性忌避を起こす要因となることが示唆された。加えて,「曖昧さの受容」は曖昧さの精査に，影響を与える特性であることが示された。

第 5 章では，本研究の総合的考察を行い，今後の課題を示した。曖昧さへのポジティブ，ネガティブ，ニュートラルな評価と，接近，回避，待機といった曖昧さへの対処の観点から，AT 概念の多次元構造モデルを示した。このモデルは異文化接触を伴う職務への適性を測る尺度を作成する上で役に立つと考える。今後の課題としては，一つは曖昧さのポジティブな側面を測定する尺度の開発である。もう一つは，曖昧さ不耐性の改善方法の提案である。本論文は，従来，詳細に検討されてこなかった，AT の多次元構造を明らかにし，加えて，現実場面での個人の AT と行動レベルの変数との関連を実証的に示した。

目次

序章　本研究の背景 1
第 1 章　Tolerance of Ambiguity 研究の動向 4
1-1　AT の定義 4
1-1-1　あいまいさの辞書的定義 4
1-1-2　AT の心理学的定義 5
1-2　AT 研究の歴史 6
1-3　AT 研究の 2 つの問題点 8
1-3-1　AT 測定尺度の信頼性・妥当性の問題 8
1-3-2　次元構造の問題 10
第 2 章　既存の AT 測定尺度の比較分析による AT の多次元構造の検討 12
2-1　目的 12
2-1-1　尺度の選定 12
2-1-2　改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度(IIAS-R) 14
2-1-3　曖昧さへの態度尺度(ATAS) 15
2-1-4　仮説 16
2-2　調査対象と方法 16
2-3　結果 17
2-3-1　相関分析 17
2-3-2　因子分析 18
2-4　考察 24
2-4-1　相関分析 24
2-4-2　因子分析 25
2-5　まとめ 27
第 3 章 日本人大学生の AT と異文化接触時の行動との関連の検討 29
3-1　目的 29
3-1-1　仮説 30
3-2　調査対象と方法 31
3-3　結果 31

3-4　考察 36
3-5　まとめ 38
第 4 章　AT と曖昧性忌避との関連の検討 41
4-1　目的 41
4-1-1　エルスバーグの壺 41
4-1-2　AT と曖昧性忌避との関連に関する先行研究 42
4-2　調査対象と方法 43
4-3　結果 44
4-3-1　エルスバーグの壺問題に関する回答結果 44
4-3-2　AT と曖昧性忌避の有無との相関分析 46
4-3-3　AT と曖昧性忌避の程度との相関分析 47
4-4　考察 48
4-4-1　エルスバーグの壺問題について 49
4-4-2　AT と曖昧性忌避の有無との相関分析 49
4-4-3　AT と曖昧性忌避の程度との相関分析 51
4-5　まとめ 52
第 5 章　総合考察 54
5-1　AT 概念について 54
5-2　AT と曖昧な場面における行動について 56
5-3　今後の課題 58
5-4　おわりに 59
＜引用・参考文献＞ 61
＜資料＞ 65
謝辞 73

序章　本研究の背景

日々の生活の中には多くの曖昧な場面が存在する。例えば，初対面の人に会うとき，相手がどのような人かわからない。自分より年上なのか年下なのか。怖い人なのか，優しい人なのか。相手のはっきりしたことがわからない。これは曖昧な場面の一つと言えるであろう。こんな時，私たちは多少なりとも緊張したり，どうしたらよいか考えたりすることがある。初対面に限らず，対人コミュニケーションにおいて，こちらの質問に対し，解釈の仕方が複数あるような曖昧な返事をされて，相手は何を考えているのかと困惑することもある。例えば，「結構です」という表現で，それが Yes を指すのか，No を指すのかを取り違えたことによる失敗談などは，誰しも聞いたことがあるだろう。対人場面に限らず，何かの試験の合否を待つような間も，どっちつかずの曖昧な場面と言えるであろう。学問においても，常に問いの答えが 1 つというわけではなく，様々な答え，解釈がなされる曖昧さを含んだ学問領域もあるであろう。これらの曖昧さがすべて同質のものであるとは限らないが，私たちの生活は様々な“曖昧さ”があふれていると言えそうである。こうした曖昧な状況を楽しく感じる人もいれば，はっきりしないことが嫌いな人もいるであろう。また，別段，気にならない人もいるであろう。曖昧な状況を positive にとらえるのであれば，それを特に問題にする必要はない。しかしながら，曖昧な状況を negative にとらえ，それが人の認知や行動にネガティブな影響を与えるとすれば，それは曖昧な状況があふれる日常生活において適応的とは言えないであろう。

心理学では曖昧さに対する反応の個人差を Tolerance of Ambiguity（以下，AT)という概念でとらえてきた。Frenkel-Brunswik(1949)は AT をパーソナリティ特性として概念化した。彼女は，曖昧さに intolerant な者は価値判断の局面において，しばしば，現実を無視し，白か黒かをはっきりさせようとしたり，早急な結論に達する傾向，また他者の無条件の全面的な承認や拒絶を求める傾向があるとした。Frenkel-Brunswik が AT を概念化してから，これまで半世紀以上もの間に多くの研究者が AT の概念を用いた研究を行ってきた。AT の概念を使用した研究は臨床心理学，産業・組織心理学，医学，教育学，起業家精神との関わり等，多岐に及んでいる(Bors, Gruman & Shukla, 2010)。それだけ，多くの研究者たちをひきつけてきた概念と言える。

しかしながら，AT 研究に全く問題がないというわけではない。Furnham & Ribchester (1995)は過去の AT 研究を概観し，AT 概念の操作的定義が不明確であることや，これまで

提案されてきたいくつかのAT測定尺度間の相関が必ずしも高くないことから，これまで行われてきた研究の知見の統合が難しいことを指摘している。吉川(1986)や西村(2007)は，これまでのAT研究のほとんどが曖昧さへのintoleraceに焦点が当てられ，曖昧さに対するpositiveな反応であるtoleranceの研究が少ないことを問題にあげ，ATを曖昧さに耐える・耐えられないの一次元的な概念として扱ってきたことを問題視している。ATは日本においては“曖昧さ耐性”と訳されることもあれば（増田，1998），“曖昧さへの寛容さ”と訳される場合もある（友野・橋本，2005）。しかし，“耐性”と“寛容さ”とでは意味が異なるであろう。例えば，アルコールに対する耐性という言い方はしても，アルコールに対する寛容とは言わないであろう。逆に反対意見に対する寛容さという言い方はしても，反対意見に対する耐性とは言い難いであろう。このようなtoleranceという単語の持つ意味の揺れもAT概念が不明確である問題点を示す例と言える。

このようにATは全く欠点のない概念とは言えないながらも，半世紀以上にわたり，心理学領域または医学，教育学といった他領域においても研究が続けられてきた。それは，私たちの日常に“曖昧さ”があふれ，曖昧さに対する反応が重要であるからであろう。私たちはしばしば，情報が足りず予測ができないで困ったり，情報があっても，それらがはっきりせず，いくつかの意味に取れ，これといった判断が難しい時がある。つまり，日常において予測や選択の困難な場面には，しばしば曖昧さが存在すると言える。予測や選択が困難な場面を“曖昧さ”という概念でくくることで日常から臨床場面まで，広範囲の事象を曖昧さの概念の範疇に入れることができる。ゆえに曖昧さに対する反応の傾向をとらえたATという概念は，様々な場面での個人の行動やパフォーマンスの予測変数となりえる汎用性のある概念と言える。包括的な学術論文データベースであるWeb of Scienceで“Tolerance of Ambiguity”というキーワードで2004年から2009年の5年間の論文を検索したところ，110件の論文が抽出された（アクセス日時：2009年12月10日）。それらを主題領域により分類すると，複数の“PSYCHOLOGY”の領域の他に“MANAGEMENT”，“NEUROSCIENCES”，“TELECOMMUNICATIONS”等の領域にわたって論文が発表されていることがわかる。しかし，日本においては，ATの研究は必ずしも活発ではない。国立情報学研究所の学術論文データベースCiNiiで“ambiguity”とtolerance”，その訳語である”曖昧さ”と“耐性”，“曖昧さ”と“寛容”のキーワードで過去10年（1999年から2009年）の論文検索をしたところ，重複するものを除き26件の論文しか抽出されなかった（アクセス日時：2009年12月10日）。つまり1年に2，3件の論文の発表数である。

先に述べたように，AT は心理学的に重要な概念であるにもかかわらず，研究数は十分ではない。

本論文では AT の心理学的研究を行う。AT は様々な学問分野において使用されている汎用性のある概念ではあるが，前述したような操作的定義や測定尺度の問題点も存在する。そこで，第 1 章において，過去に行われてきた AT 研究を概観し，AT の定義を整理する。加えて AT 研究の問題点を示す。第 2 章において，第 1 章で示した問題点を踏まえ，本研究で主として使用する AT 測定尺度の比較分析を行う。それにより，AT の多次元構造の検討を行う。また使用する AT 測定尺度の特徴を見る。第 3 章では，曖昧な場面の好例であると考えられる異文化接触を例にとり，日本人大学生の AT と異文化接触時の行動との関連性を検討する。第 4 章では確率情報を含んだ客観的に曖昧な選択場面を設定し，個人の AT と曖昧な場面における選択との関連について検討する。第 5 章ではこれまでの章を踏まえ， AT 概念の総合的な考察を行う。

第 1 章　Tolerance of Ambiguity 研究の動向

この章では，Tolerance of Ambiguity（以下，AT）の概念が歴史的にどのように定義されてきたのかを文献調査により見ていく。次に AT の先行研究の動向を概観する。そして，研究が進められてきた中で指摘されている問題点について整理していく。

1-1　AT の定義

1-1-1　あいまいさの辞書的定義

AT の定義を見ていく前に，まずは“Ambiguity”について，辞書的な定義を確認する。主要な英英辞典による Ambiguity，派生語である“Ambiguious”の定義は次のようになっている。

If you say that there is ambiguity in something, you mean that it is unclear or confusing, or it can be understood in more than one way.

（コウビルド米語版英英和辞典　2008）

Having or expressing more than one possible meaning, sometimes intentionally.

(ケンブリッジ英英辞典　第 2 版）

と書かれている。次に“Ambiguity”は日本語では，どう訳されているか確認する。主要な英和辞典では，“Ambiguity”とは“unclear”であり，“confusing”であり，意味の理解が二通り以上あるような状態ということになる。

英和辞典によると“Ambiguity”は，

1 (意味・意図などの)あいまいさ，疑わしさ，不明確さ；多義［両義］性

2 あいまい［多義的］な語句［表現］

3 〔言語〕 (ある文の語彙的あるいは統語的な)あいまい性.

4 〔航海〕 (中心線に対して)右か左を決めることができない.

（ランダムハウス英和大辞典 第 2 版）

1　両義（のあること）；多義性，あいまいさ，不確かさ

2　あいまいな表現

3　〔言語〕あいまいさ，多義性

4　対立する事項

（ジーニアス英和大辞典　2001）

とされている。複数の訳語があるが，どちらの辞典においても“あいまい（さ）”が最も多

く記載されている。そこで，本論文においては“Ambiguity”の訳語を“あいまいさ”とする。

“あいまいさ”とは一般的にどのように定義されているのか，次に国語辞典を見てみると次のようにある。

1　暗いこと。また，そのさま。

2　物事がはっきりしないこと。物事が確かでないさま。あやふや。不明瞭。

3　うしろ暗いこと。いかがわしいこと。怪しげな，疑わしいさま。

（日本国語大辞典 第 2 版）

1　態度や物事がはっきりしないこと。また，そのさま。あやふや。「―な答え」

2　怪しくて疑わしいこと。いかがわしいこと。また，そのさま。「―宿(やど)」

（デジタル大辞泉　2009 年）

となっている。これらの辞典に載っている定義を総合的に考えると，あいまいさとは物事がはっきりしないこと，あやふやであること，不明瞭であること，怪しい，いかがわしいことということができる。一般的には上記のような意味で“あいまいさ”が定義されているわけだが，“あいまいさ”という言葉の持つ意味そのものが，必ずしも明確ではなく，あいまいさを含んでいると言える。本研究では「あいまい」が多様されることから，以下では感じの「曖昧」で表記することにする。

1-1-2　AT の心理学的定義

次に心理学においては曖昧さをどのようにとらえ，AT をどのように定義しているのかについて述べていく。AT は Frenkel-Brunswik(1949)により曖昧さに対するパーソナリティ特性として概念化された。彼女は，曖昧さに intolerant な者は価値判断の局面において，しばしば，現実を無視し，白か黒かをはっきりさせようとしたり，早急な結論に達する傾向，また他者の無条件の全面的な承認や拒絶を求める傾向があるとした。しかし，彼女は曖昧さそのものは定義しなかった。曖昧さを定義したのは Budner である。Budner(1962)は，曖昧な状況を“十分な手がかりがないことにより，適切に構造化やカテゴリー化ができない状況”と定義し，それを次の 3 つに分類した。よく知った手がかりがない新しい状況を“新奇性(novelty)”，手がかりがありすぎる複雑な状況を“複雑性(complexity)”，それぞれの要素や手がかりが異なった事態を招くような矛盾した状況を“不可解性(insolubility)”とした。Budner(1962)は新規性，複雑性，不可解性に対する耐性を 2 つの側面に分け, Tolerance of Ambiguity を“曖昧な状況を好ましいものとして知覚する傾向”,

Intolerance of Ambiguity を“曖昧な状況を恐怖の源泉として知覚（解釈）する傾向”と定義した。Norton(1975)は，Intolerance of Ambiguity を“漠然性，不完全性，断片的，多義性，確率的，非構造的，不確実性，非一貫性，逆説的，不明瞭と特徴づけられる情報を，心理的不快・恐怖の源として知覚，解釈する傾向”と定義している。Norton(1975)は，“ambiguity”の潜在的な定義（implicit definition）を得るために，過去の心理学研究で用いられてきた“Ambiguity”を上記の定義に見られるような性質に分類した。異なる語句を用いて定義してはいるが，曖昧さの性質のとらえ方は Budner(1962)も Norton(1975)も類似している。その後の多くの AT 研究において Budner(1962)や Norton(1975)による曖昧さ，及び AT の定義が使用されている。

なお，前述のように AT の訳語として“曖昧さ耐性”や“曖昧さへの寛容さ”が使用されているが，これらは言葉の意味から，同一の意味ととらえにくい。そこで本論文においては，AT 概念を再考する上で，あえて日本語に訳さず Tolerance of Ambiguity（AT）を使用する。

1-2　AT 研究の歴史

Furnham & Ribchester (1995)は AT に関する先行研究を概観している。それによると Frenkel-Brunswik (1949)が人種的偏見を説明するパーソナリティ特性として AT の概念を発表して以降，多くの研究者が AT という概念に引きつけられてきたとしている。1950 年代から 1970 年代半ばまで AT の概念を用いた研究が多数行われた。その多くは AT と他の変数との関連を検討したものであった。一連の研究の中で，AT とエスノセントリズムには正の相関（r =.55），権威主義との間にも正の相関(r ＝.26～.55)があることが示された（Block & Block, 1951; Budner, 1962）。1970 年代には，保守主義や女性解放運動，性役割志向性といった社会政治的イデオロギーと AT の関連を示した研究がなされた。例えば，女性解放グループの成員は非成員に比べ，曖昧さに対し，より tolerant であることが示されている(Pawlicki & Almquist, 1973)。また，性役割が両性具有型，もしくは性別と性役割が交差している者は，性別と性役割が一致する者に比べ，曖昧さに寛容であることが示されている（Rotter & O'Connell, 1982)。これらの研究はすべて AT を独立変数としたものであるが，Glover,Romero & Peterson(1978)は異文化シミュレーション・トレーニングによって AT が高まり，独断主義傾向が減少するという知見を示した。これは，AT を従属変数として使用した数少ない研究の一つである。臨床の分野においては Foxman(1976)がメンタルヘルスの研究において，AT と自己実現の関連を示し，自己実現の得点が高い者が，低

い者に比べ AT も高いことを示し，その結果から AT が患者の治療効果の測定に有用であると結論づけた。80 年代にはグループ間の AT を比較した研究が示された。例えば，Tatzel(1980)は 20 代後半の学生が，それより若い，もしくは年上の学生に比べ AT が低いこと，芸術専攻の学生が，経営学部の学生よりも AT が高いことを示した。Raphael & Xelowski(1980)は高校の退学者と在学生の AT を比較し，在学生の方が AT が高いことを見出した。Geller,Faden & Levine(1990)は 400 人近くの医学部生の AT を測定した。その結果，学年による差は見られなかったが，男子学生，白人，若い学生は AT が低いことが示された。また，精神科医志望の学生が外科医志望の学生より AT が高いこと，AT が低い学生は，アルコール依存症に対し否定的な見解を持っていることが示された。これらをふまえ，Geller らは，AT が医学部生の専門の選択の決定において有用な指標であり，また，医学部の教育は学生の AT に影響を与えるものではないと結論づけた。近年においては，Zaccaro(2007)はリーダーシップ研究において，AT の高い将校が意思決定シュミレーションにおいてよい成績を収めたことから，AT が優れたリーダーの資質であることを示した。Zenasni,Besancon & Lubart(2008)は思春期の生徒の創造性と AT の関連を検討し，AT がより高い生徒が，創造性もより高いことを示した。また，Yankhnich and Ben-Zur(2008)では AT が高い者が，移住先の国において，より高い well-being の値を示したという結果を報告している。

日本では，吉川（1986）が AT 概念の特徴の説明を試み，AT と YG 性格検査，モーズレイ性格検査，CMI 健康調査票の回答との関連を検討した。結果から吉川は AT が高い者は低い者に比べ，自己・他者・社会への肯定的評価感情が高く，自律神経系が安定し，身体的自覚症状の訴えが少ないことを見出した。増田（1998）は AT が心理的ストレスプロセスに与える影響について検討し，AT の低い者が高い者に比べ，抑うつ度が高く，生活事件体験をよりネガティブに評価していることを示した。植村（2001）は AT が新入成員への寛容的反応の及ぼす影響を検討し，AT が高い者が低い者に比べ，潜在的な異質性への恐れの無さを示す指標である異質耐性が高いことを示した。友野・橋本（2005）は AT が新入学生の適応過程に及ぼす影響を検討し，曖昧さに intolerant な者は入学後，時間が経過しても不適応状態が持続していることを示した。

AT 研究の多くが基本的には AT が高い者が低い者に比べ，様々な環境において適応的であるという結果を示唆している。このように半世紀に以上にわたり，AT は偏見やストレス，不安といった心理学における重要な概念，個人の適応的行動との関連が示されてきた。し

かしながら，AT 研究の問題点も指摘されている。

1-3　AT 研究の 2 つの問題点

Furnham & Ribchester (1995)は AT の操作的定義が明確ではないこと，従来の AT 概念が多次元構造を想定していないことを問題点としてあげている。半世紀にわたる AT 研究において，いくつもの AT 測定尺度が作成されてきたが，Furnham(1994)は先行研究で多く使用されている 4 種類の AT 測定尺度の相関・因子分析を行い，尺度間の相関が必ずしも高くないこと，因子分析の結果，一因子構造としている尺度において複数の因子構造が見られたことから，これまでに作成されてきた AT 測定尺度で測定されている AT が同一のものとは言えないこと，また AT が一次元構造ではなく，多次元構造と考えるべきであることを指摘している。大きく分けると AT 研究の問題点としては，AT 測定尺度の信頼性・妥当性の問題と AT 概念の次元構造の問題の 2 つがあげられる。そこで，この節では上記の 2 つの問題を検討する。

1-3-1　AT 測定尺度の信頼性・妥当性の問題

AT 測定に関しては，AT の概念が提出されて以降，様々な方法がとられてきた。知覚的手法による AT の測定では，例えば，Block & Block (1951)は自動運動現象における光点の移動距離を判断させ，曖昧さに intolerant である者ほど，判断の基準の形成が早いとし，形成が早いか遅いかを AT の測度とした。また，彼らは，その測度を使い，人種的偏見の強い者は，より曖昧さに intolerant であることを示した。Millon (1957)も同様の測度を用いて，権威主義的な者ほど曖昧さに intolerant であること示した。Levitt (1953)は，直線が 1 本ずつ書き加えられ 20 本目でトラックや靴の絵が完成する 20 枚の絵を刺激として使用した。最終的に完成された絵が出るまでに，その絵が何であるかを質問し「わからない」以外の回答の数が多いほど曖昧さに intolerant であるとした。結果としては，この測度が，エスノセントリズムと相関を持つことが示された。

Kenny & Ginsberg (1958)は①Block & Block (1951)の自動運動現象を使った測度や Jones (1955)の反転図形を用いた知覚的手法の測度，②質問紙による AT 測定尺度である O'Conner(1952)の Walk's A scale，③権威主義的パーソナリティを測定する質問紙の 3 つを用いて，相関分析を行った。その結果，66 の相関係数のうち，権威主義的パーソナリティと有意な相関があったものは Walk's A scale を含め 4 つしかなかった。これにより，Kenny & Ginsberg は，知覚的手法で測定されてきた AT の間に相互に関連がないことが示し，加えて，従来言われてきた AT と権威主義的パーソナリティとの関連にも疑問を呈した。

O'Conner(1952)は AT 測定の尺度として“何事も正しい方法は 1 つ以上ある”，“最も良いリーダーは従う者が何も心配しないように十分な支持を与える”といった 8 項目に 7 件法で回答する Walk's A scale を開発し，AT とエスノセントリズム間の関連を示した。他の研究者もこの尺度を使い，権威への服従といった要因との関連を示した（Kenny & Ginsberg,1958）。しかし，その後の研究で Walk's A scale は内的整合性に問題があることが示された(Ehrich, 1965)。

Budner(1962)は，現実の行動場面を想定していない知覚的手法による AT の測定には限界があるとした。Budner(1962)は，AT の概念について構成要素の側面から定義し，その定義を元にした適切な AT 測定尺度を作成するために，AT の再定義を試みた。そして黙従回答の影響を避けるために, tolerance に関する質問項目と intolerance に関する質問項目が 8 項目ずつで計 16 項目からなる The Scale of Tolerance-Intolerance of Ambiguity を作成した。この尺度はα係数は.49 と高くはなかったが，権威主義的パーソナリティ尺度，対人関係において他者を利用しようとするマキャベリアニズムの測定尺度との相関を示した。Budner(1962)以降も，Rydell & Rosen（1966）による Rydell – Rosen Scale や MacDonald(1970)による AT-20 といった尺度も作成されたが，いずれも，その後の研究者によって問題点を指摘されることになった(Norton,1975；Kirton,1981)。

Norton(1975)は，Rydell-Rosen Scale や AT-20 が内的整合性が低く，十分に妥当性が示されていないと指摘し，新たに Measures of Ambiguity Tolerance(MAT-50)を作成した。MAT-50 は信頼性も高く，Meresko,Rubin,Shontz & Morrow(1954)の Rigidity 尺度や Budner(1962)の The Scale of Tolerance-Intolerance of Ambiguity とも正の相関を示したことから，妥当性もあると結論づけた（Norton,1975）。

しかしながら, AT 測定尺度として MAT-50 が多く使用されているかというと必ずしもそうではない。心理学分野の文献データベースである PsycINFO にキーワードとして“ambiguity”，“tolerance”を入れ，過去 10 年間の論文検索したところ，54 件の論文が抽出された（アクセス日時：2009 年 12 月 14 日）。そのうち，データベースにより使用している尺度がわかるものが 29 論文あり，そこで最も使用されていた AT 測定尺度は MacDonald(1970)の AT-20 であり, 10 論文で使用されていた。他には,Budner(1962)の The Scale of Tolerance-Intolerance of Ambiguity が 5 論文，McLain(1993)の MSTAT- I が 4 論文，MAT-50 が 4 論文であった。それ以外の尺度を使用した論文が 9 件見られた。1 件の論文で複数の AT 尺度が同時に実施されている場合もあったが，いずれにせよ，MAT-50 が

最も使用されている尺度であるとは言いがたい。

1-3-2　次元構造の問題

様々なAT測定尺度が使用されているが，これらの尺度は，適切にATを測定しているのだろうか。Furnham(1994)はこれらの問題を検討するために，O'Connor(1952)のWalk's A scale，Budner(1962)のThe Scale of Tolerance-Intolerance of Ambiguity，MacDonald(1970)のAT-20，Norton(1975)のMAT-50，の4種類のAT測定尺度の相関分析を行った。尺度間の相関は，最も高いものでr=.82であったが，その他はr=.47~.62と，同一概念を測定しているにもかかわらず，十分な高さを示さなかった。このことから，同じAT概念を扱う研究においても測定尺度が異なる場合は，その結果を比較することは困難であると指摘している。また彼は各尺度内での因子分析を行った。各尺度内での因子分析を行った結果，多次元構造を想定していない3つの尺度において，それぞれ複数の因子を抽出した。さらに4つのそれぞれの尺度の因子分析において抽出した計21因子による高次の因子分析を行い，6つの因子を抽出した。6つのうち4つは選好に関連した曖昧さへのintoleranceの因子，1つは不安に関連した曖昧さへのintoleranceの因子，残りの1つは哲学，認識論的選好に関連した曖昧さへのintoleranceの因子であった。Furnham(1994)は結果から，これまでに作成されたAT測定尺度が同じものを測定していなかったこと，すなわちATが一次元構造ではなく多次元構造であることを指摘した。

つまり，それぞれのAT測定尺度が異なるATを測定しているということ，またATが多次元構造を持つとすれば，ATを一次元として測定していた従来の尺度でATを十分に測定できていない可能性を示したことになる。また，Bors et al.(2010)もBudner(1962)のThe Scale of Tolerance-Intolerance of AmbiguityとMcLain(1993)が作成したMSTAT-Ⅰの確認的因子分析を行い，想定されている一因子モデルの適合度が高くないことを指摘した。西村(2007)は，Norton(1975)のMAT-50と友野・橋本（2005）が作成した「改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度」は，ATを曖昧さに耐えられる・耐えられないの一次元で測定していると指摘し，曖昧さへの耐性の低さにも複数の側面があること，曖昧さへの耐性の高さにも，曖昧さを“脅威と感じずに受け入れる”ことと“好んで関わる”ことが混同されているのではないかと述べた。

従来，一因子構造と想定されていたATが，実は多次元構造であるとすれば，これまで行われてきたAT研究は，それぞれ異なるAT測定尺度を使用し，ATの異なる側面をとらえ，その側面とエスノセントリズムや権威主義的パーソナリティといった他の要因との関連を

検討してきたことになる。AT 研究を進めていくためには，使用する AT 測定尺度の次元性を把握し，それぞれの尺度がどのような AT の側面を測定しているかを理解したうえで，使用する必要がある。そこで，次章では我が国で使用されている 2 つの AT 測定尺度の比較分析を行い，AT の多次元構造の検討を行う。

第 2 章　既存の AT 測定尺度の比較分析による AT の多次元構造の検討

2-1　目的

前章の 3 節で示したように，AT 研究を行う上で測定尺度の問題と次元構造の問題があるが，本章では多次元性の問題について検討する。AT の多次元構造を示し，本論文で主として使用する尺度が AT のどのような側面を測定しているのかを明らかにすることが本章の目的である。この章では，友野・橋本（2005）により，曖昧な場面を対人場面に限定し作成された AT 測定尺度「改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度(Revised Interpersonal Intolerance of Ambiguity Scale:以下 IIAS-R)」と西村（2007）により，曖昧な場面の抽象度を高め作成された「曖昧さへの態度尺度(Attitudes towards Ambiguity Scale:以下 ATAS)」の比較分析により，これらが測定する AT の多次元構造の検討を行う。まず，西村（2007）が指摘している IIAS-R の問題点，すなわち曖昧さへの intolerance の測定に主眼が置かれ, tolerance が測定されていないという問題を検討する。次いで, IIAS-R と ATAS の両者の共通性と，多次元性について検討する。2 つの尺度の詳細，及び，これらの尺度を分析対象とした理由については後述する。問題を検討するにあたり上記の 2 つの尺度を同一の被調査者に同時に実施し，尺度間の相関分析，因子分析を行う。

2-1-1　尺度の選定

IIAS-R と ATAS を分析対象とした理由を示すために，これまで日本において，どのような AT 測定尺度が作成，使用されてきたかを述べる。その後に，選定理由と各尺度の特徴を記述する。日本の AT 研究で使用されてきた AT 測定尺度について表 2－1 に示した。

日本においては今川（1981）が O'Conner(1952)の Walk's A scale ，Budner(1962)の The Scale of Tolerance-Intolerance of Ambiguity, Norton(1975)の MAT-50, MacDonald(1970)の AT-20，を邦訳し，そこから 3 度にわたる項目分析を行い，AT の測定に貢献度の低い項目を削っていき，ATS-Ⅳという AT を測定する尺度を作成した。これは今川（1981）により高い信頼性が示された。増田(1998)は Norton(1975)の MAT-50 を邦訳し，その中で抑うつ度得点と関連のあるものを 24 項目抽出し，「心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度」を作成した。これは MAT-50（全 61 項目）よりも信頼性，妥当性が高いことが示された。また増田（1998）は MAT-50 の 8 つの下位尺度の構成について，その基準や下位尺度作成の手続きが不明であることを問題とした。友野・橋本（2005）は Norton(1975)の MAT-50 が広範な曖昧さをすべて網羅しようとして，却って焦点がぼやけていると指摘している。そ

こで，彼らは曖昧さの領域を対人場面に限定した「改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度(IIAS-R)」を作成した。一方，西村（2007）は，従来の AT 研究が AT の低さ（曖昧さへの耐えられなさ）という否定的態度を中心に論じられてきたと指摘し，使用されてきた尺度についても，曖昧さへの反応について，“耐えられる・耐えられない”という一次元で測定をしていると述べている。そこで，西村（2007）は曖昧さへの態度を多次元的に測定する「曖昧さへの態度尺度(ATAS)」を作成した。この尺度は「曖昧さの享受」,「曖昧さへの不安」,「曖昧さの受容」,「曖昧さの統制」,「曖昧さの排除」の 5 つの下位尺度から構成されている。

表2－1 日本のAT研究で使用されているAT測定尺度の概略

尺度名	作者	項目数	構造	質問項目作成の方法・特徴
Ambiguity Tolerance Scale Ⅳ(ATS-Ⅳ)	今川(1981)	44	1次元	O'Conner(1952)のWalk's A scale , Budner(1962)のThe Scale of Tolerance-Intolerance of Ambiguity, Norton(1975)のMAT-50, MacDonald(1970)のAT-20の80項目を邦訳し，そこから3度にわたる項目分析を行い，ATの測定に貢献度の低い項目を削除し，44項目を抽出。
心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度	増田(1989)	24	1次元	Norton(1975)のMAT-50の日本語版を用い、因子分析を実施。抑うつ度得点と関連のあるものを24項目抽出。
改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度(IIAS-R)	友野・橋本(2005)	17	3次元	曖昧さの領域を対人場面に限定。日本人(大学生)から対人場面における曖昧な状況を収集し，質問項目の作成。3つの下位尺度から構成される。
曖昧さへの態度尺度(ATAS)	西村(2007)	26	5次元	曖昧さの場面の抽象度を高め，尺度を作成。日本人(大学生)から曖昧さへの態度について収集し質問項目を作成。5つの下位尺度から構成される。

IIAS-R を分析対象として選んだ理由は，①MAT-50 の問題点を考慮して作成されたこと②曖昧な場面を日本人から収集している点である。国内の研究においては AT の測定には主として今川（1981）の ATS-Ⅳ，増田(1998)の「心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度」が使用されている(e.g.植村, 2001；村上, 2002；藤田, 2008)。この 2 つの尺度は前述したとおり，MAT-50 を日本語に翻訳したものを基本として作成されている。また，MAT-50 を元にした増田(1998)の 心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度」は西村（2007）の ATAS の複数の下位尺度と相関が示されている(西村, 2007)。しかしながら，前述のとおり，近年 MAT-50 の問題点が指摘されている（増田,1998；友野・橋本,2005)。IIAS-R は MAT-50 の問題点を考慮したうえで作成された尺度である。また，英語版の翻訳から出発している ATS-Ⅳや「心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度」とは異なり，尺度項目の作成を日本人調査協力

者の自由記述により行っている点で，より日本人にとっての曖昧な場面に特化して作成された尺度と考えられる。MAT-50 の問題点を考慮し，また日本人から曖昧な場面を収集していることから IIAS-R の分析を行うことにした。

西村（2007）の ATAS を比較対象としたのは，この尺度が曖昧さに対する肯定的態度，否定的態度を含んだ項目で作成されているためである。ATAS は多次元性が考慮されており，また増田（1998）の 「心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度」との相関が示されており，後に，本論文における考察結果と関連して考察ができると考えたためである。さらに，曖昧な状況を対人場面に限定して作成された IIAS-R と，曖昧さへの態度の多面性に焦点を当て作成された ATAS という性格の異なる 2 つの尺度を比較検討により，AT 概念を検討するのに有効であると考えた。分析に入る前に 2 つの尺度の作成された背景についてまとめておく。

2-1-2　改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度(IIAS-R)

MAT-50 への批判

友野・橋本（2005）は MAT-50 の問題点として，①下位尺度間の相関係数に低い値が見られる点をあげている。それにもかかわらず，AT を 1 次元として捉え，全 61 項目の合計得点のみを分析に用いているとしている。②MAT-50 日本語版の全 61 項目の因子分析を行った結果，いずれの因子にも属さない項目が多く，その後の分析に用いられる項目が少ないことが，分析効率を悪くしているとしている。結果的に MAT-50 は広範な曖昧さをすべて網羅しようとして，却って，焦点がぼやけてしまっていると指摘している（友野・橋本,2005）。

IIAS-R の作成

曖昧さへの非寛容の下位概念を領域に絞って検討する必要性から，友野・橋本（2005）は，曖昧さへの非寛容の領域を対人場面に限定した IIAS-R を作成した。友野・橋本（2005）は Budner(1962)の Intolerance of Ambiguity の定義である“曖昧な状況を脅威の源として知覚（解釈）する傾向”を対人場面に限定し，対人場面における曖昧さへの非寛容を“他者との相互作用において生じる曖昧な事態を恐れの源泉として知覚（解釈）する傾向”と定義した。また，従来の AT 測定尺度の質問紙が研究者の主観的観点で曖昧さの状況が設定されているとし，尺度項目の作成を調査協力者からの自由記述調査をもとに対人場面における曖昧な状況の設定を行った。下位尺度の構成は人間関係の形成過程に対応させ「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」，「半見知りの関係における曖昧さへの非寛容」，「友

人関係における曖昧さへの非寛容」の 3 つとした。尺度項目は 17 項目で，評定は「1．全く同意しない」～「7．とても強く同意する」の 7 件法で回答する。曖昧さに intolerant であるほど得点が高くなる。IIAS-R は毛利・丹野（2001）の対人不安尺度，善明（1989）の独断主義尺度日本語版との間に正の相関が見られた（友野・橋本,2005）。また，再検査信頼性の検討においても十分な値を示し，この尺度は妥当性，信頼性を備えていることが示されている。

2-1-3　曖昧さへの態度尺度(ATAS)

AT 概念の一次元性に対する批判

西村(2007)は，曖昧さに対する態度が，これまで曖昧さへの耐性の低さという否定的態度を中心とした一次元的な観点から論じられてきたと指摘している。既存の AT 測定尺度が，曖昧さへの耐性の低さを問う項目で大部分が占められおり，耐える・耐えられないという一次元で測定が行われていると指摘する。また先行研究では，曖昧さへの耐性の低さとネガティブな側面の関連を見たものが多く，曖昧さへの耐性の高さについての検討が不十分であるとしている。西村は曖昧さへの態度には，区別すべき複数の側面が存在するとし，それらを測定する尺度の作成を試みた。

ATAS の作成

西村（2007）は，曖昧さへの態度を“曖昧な刺激の処理において生じる，認知的，情緒的反応パターン”と定義した。尺度項目作成にあたり，曖昧さへの態度について日本人大学生から収集を行った。西村(2007)は，既存の AT 測定尺度では場面や状況が特定されており，それが影響し，曖昧さへの態度の特徴が表れにくいと考え，場面抽象度を高め，尺度を作成した。尺度項目は「(曖昧さ) への (反応)」という文章構成になるようにしている(e.g. はっきりしない状況におかれると不安になる)。尺度は 26 項目から成り，評定は「1.まったくあてはまらない」～「6．非常にあてはまる」の 6 件法である。下位尺度は以下の 5 つで構成されている。

「曖昧さの享受」

曖昧さを魅力的なものと評価し，関与していくことに楽しみを見出す傾向

「曖昧さへの不安」

曖昧さに不安などの情緒的混乱と，それに伴う対処の難しさを感じる傾向

「曖昧さの受容」

曖昧さをそのまま認めて受け入れられる，曖昧さへの親和性や寛容性を表す傾向

「曖昧さの統制」

曖昧な状況を否定的に評価し，知的に把握・対処（統制）しようとする傾向

「曖昧さの排除」

曖昧さ自体を認めず，排除して白黒をつけたい傾向

この尺度は信頼性の検討も行われ，十分な値が示された。他の尺度との関連としては，この尺度の下位尺度である「曖昧さの不安」,「曖昧さの統制」,「曖昧さの排除」と増田(1998)の「心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度」との間に正の相関,「曖昧さの受容」との間に負の相関が示されている。その他に強迫傾向尺度（吉田他,1995），抑うつ傾向測定尺度(福田・小林,1973)，と ATAS の下位尺度の「曖昧さの不安」との間には正の相関が認められている(西村,2007)。

2-1-4　仮説

調査を実施するにあたり，以下の仮説を立てた。

仮説 1. IIAS-R の下位尺度は，ATAS の「曖昧さへの不安」,「曖昧さの排除」といった曖昧さへの否定的態度と正の相関を示し,「曖昧さへの享受」,「曖昧さの受容」といった肯定的態度と負の相関を示す。

仮説 2. 場面を抽象化し作成された ATAS と具体的場面に限定し作成された IIAS-R の尺度項目には概念的に共通性があるとともに，複数の因子において両尺度の項目が混在する。

2-2　調査対象と方法

調査対象は近畿地区の国立大学，私立大学に在籍する人文・社会科学系学部に所属の日本人大学生 99 名（男性 30 名，女性 69 名）であった。平均年齢は 19.5 歳（SD=1.1）であった。調査期間は 2009 年 10 月～12 月である。質問紙は授業中，サークル活動中に配布され，その場で実施回収した。質問紙は 1.フェイスシート,2.留学生との交流に関する質問　3. ATAS, 4. IIAS-R の順で構成した。質問紙については論文末に資料として附す。尚，質問紙は「留学生との交流に関する調査」という名目で行った。本章で分析に用いるのは 1，3，4

の部分である。

2-3　結果

IIAS-R，ATAS の下位尺度ごとの得点の平均値，標準偏差，得点範囲，Cronbach の α を表 2－2 に示した。“友人関係における曖昧さへの非寛容”，“曖昧さへの不安”尺度の α 係数の値は.70 より低いが，項目数が少ないことを考慮して許容範囲であると判断した。

表2－2　各下位尺度得点と信頼性係数

	N	項目数	平均値	SD	Range	α 係数
初対面の関係における非寛容（I）	99	6	25.1	7.6	6-42	0.85
半見知りの関係における非寛容（I）	97	6	24.7	6.0	6-42	0.73
友人関係における非寛容（I）	98	5	19.0	5.2	6-33	0.69
曖昧さの享受（A）	97	7	30.5	5.2	14-42	0.82
曖昧さへの不安（A）	99	6	23.8	4.4	10-35	0.66
曖昧さの受容（A）	97	5	18.6	3.7	8-30	0.70
曖昧さの統制（A）	97	5	21.6	3.5	12-29	0.72
曖昧さの排除（A）	99	3	11.8	2.9	3-18	0.77

I：IIAS-Rの下位尺度
A：ATASの下位尺度

2-3-1　相関分析

各尺度間のピアソン相関係数を算出したところ，表 2－3 のような結果が得られた。以下，有意な相関について述べる。「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」，「半見知りの関係における曖昧さへの非寛容」，「友人関係における曖昧さへの非寛容」と「曖昧さへの不安」との間には正の相関が見られた（r=.34～.58, p<.01）。「初対面の関係のおける曖昧さへの非寛容」と「半見知りの関係における曖昧さへの非寛容」，「友人関係における曖昧さへの非寛容」との間には正の相関が見られた（r=.53～.71, p<.01）。「半見知りの関係における曖昧さへの非寛容」と「友人関係における曖昧さへの非寛容」との間には正の相関が見られた（r=.34, p<.01）。「曖昧さの享受」と「曖昧さの統制」，「曖昧さの排除」との間には正の相関が見られた（r=.41～65, p<.01）。「曖昧さへの不安」と「曖昧さの統制」，「曖昧さの排除」との間には弱い正の相関が見られた（r=.20～24, p<.05）。「曖昧さの受容」と「曖昧さの排除」との間には負の相関が見られた（r=－.51, p<.01）。「曖昧さの統制」と「曖昧さの排除」との間には正の相関が見られた（r=.66, p<.01）。

表2－3　各尺度間の相関係数

	初対面の関係における曖昧さへの非寛容	半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	友人関係における曖昧さへの非寛容	曖昧さの享受	曖昧さへの不安	曖昧さの受容	曖昧さの統制	曖昧さの排除
初対面の関係における曖昧さへの非寛容	―	.71**	.53**	−.07	.58**	.04	.14	−.01
半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	(97)	―	.50**	.00	.52**	.10	.15	.06
友人関係における曖昧さへの非寛容	(98)	(96)	―	−.07	.34**	.03	.11	.03
曖昧さの享受	(97)	(95)	(96)	―	.05	−.10	.65**	.41**
曖昧さへの不安	(99)	(97)	(98)	(97)	―	−.06	.24*	.20*
曖昧さの受容	(97)	(95)	(96)	(95)	(97)	―	−.17	− .51**
曖昧さの統制	(97)	(95)	(96)	(96)	(97)	(95)	―	.66**
曖昧さの排除	(99)	(97)	(98)	(97)	(99)	(97)	(97)	―

右上は相関係数、左下（　）内は有効標本数を示す。　　*p<.05　**p<.01

2-3-2　因子分析

IIAS-R，ATAS の尺度項目 43 項目について因子分析を行う前に，各尺度ごとに因子分析を行った。

IIAS-R の因子分析（表 2－4）

因子の抽出は主因子法で，プロマックス回転により行った。因子数 1 で初期値を求め，スクリー基準によって因子数を想定し分析を行っていった。その結果，3 因子解を選択した。どの因子にも負荷量が.40 に満たない 2 項目を除き，15 項目により再度，主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。最終的な因子分析結果の因子負荷量，及び因子間相関を表 2－4 に示した。項目 11 の“中途半端に親しい友人の発言は，はっきりしないことが多いので困ります。”は負荷量が 2 つの因子において.40 以上あり，第 1 因子に含まず，削除する方法も考えられるが，今回の因子分析の目的は尺度作成ではなく，IIAS-R の構造を確認する分析であるため，項目の削除が少ない方が適当と考え，第 1 因子に含めた[1]。

第 1 因子は IIAS-R の下位尺度である「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」の項目

[1] 因子構造の確認では，一般的に確認的因子分析が用いられるが，ここでは，厳密にモデルの適合度を検討するのが目的ではなかったので，便宜的に探索的因子分析を行った。

[2] 効用（選択肢を採択した結果に対する望ましさ）の期待値を考える理論を期待効用理論(expected utility

と「半見知りの関係における曖昧さへの非寛容」の項目で構成された。第 2 因子，第 3 因子はそれぞれ 3 項目で，IIAS-R 原版の下位尺度の「半見知りの関係における曖昧さへの非寛容」，「友人関係における曖昧さへの非寛容」の項目が混在して構成された。各因子間に r =.38～.57 の相関が認められた。

表 2-4　IIAS-R の因子分析結果

IIAS-Rの因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	因子1	因子2	因子3
因子1			
12 初対面の人と2人きりでいる時、話をするべきかどうか、とまどいます。	.731		
9 表面上の付き合いにとまどっている人との会話は、どこかお互いに本音を出すまいとしていて、中身がないので苦痛です。	.696		
11 中途半端に親しい友人の発言は、はっきりしないことが多いので困ります。	.641		-.462
7 初対面の人に、どの程度親しく接してよいのかとまどいます。	.585		
1 見ず知らずの人と一緒にいる時、私に対してどのように振舞うのか予想がつかないと、とまどってしまいます。	.549		
6 友達の友達に会った時、どうすべきか迷います。	.503		
8 初対面の人と、お互いを探り合いながら話します。	.471		
14「知人」程度の人と出会うと、お互い気付かないフリをしてしまい気まずいです。	.462		
2 あいさつぐらいしかしない人をその日、二度目に見かけた時、どう接してよいのかわかりません。	.442		
因子2			
4 友達の買い物に付き合って物を選ぶ時は、何が欲しいかはっきりして欲しいです。		.718	
5 私に対する人物評が、私の親友達の間で対立する時は、とても困ります。		.687	
3 隣人と出会った時、お互い顔は知っているのに、あいさつしてよいのかどうか迷います。		.412	
因子3			
15 友人が私の側にいて携帯電話で話していると、私はその話の内容が気になります。			.663
16 昔の知人とあいさつをかわすのは、緊張します。			.632
17 たまにしか会わない友人が、こちらの情報をどの程度持っているのか気になります。			.432

因子間相関	因子1	因子2	因子3
因子1	-	.57	.46
因子2		-	.38
因子3			-

ATAS の因子分析（表 2－5）

IIAS-R と同様，因子の抽出は主因子法で，プロマックス回転により行った。因子数 1 で初期値を求め，スクリー基準によって因子数を想定し分析を行っていった。その結果，5 因子解を選択した。どの因子にも負荷量が.40 に満たない 2 項目を除いて，24 項目により再度，主因子・プロマックス回転による因子分析を行った。最終的な因子分析結果の因子負荷量，及び因子間相関を表 2－5 に示した。項目 9“見たことがないものは見ておくにこしたことはないので，ぜひ見てみたい”，項目 15 の“見たことがないものに出会うと怖くなる。”は負荷量が低いが，ATAS の構造分析のため項目の削除が少ない方が適当と考え，項

目を残した。

第 1 因子は項目 8“どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ。”，項目 5“一貫していないことには信頼がおけない。”など，西村(2007)の ATAS の原版では「曖昧さの排除」,「曖昧さの統制」の因子項目で構成されていることから,「曖昧さの統制・排除」と命名した。第 2 因子は 6 項目中 4 項目が「曖昧さの享受」の項目から構成されていることから，同様に「曖昧さの享受」と命名した。第 3 因子は ATAS 原版の下位尺度の「曖昧さの統制」,「曖昧さの享受」,「曖昧さの排除」,「曖昧さの受容」の項目が含まれている。いずれも曖昧さに対し積極的に働きかける項目で構成されていることから“曖昧さへの積極的関与”と命名した。第 4 因子は，ATAS の原版の「曖昧さへの不安」因子の 4 項目で構成されているため，同様に「曖昧さへの不安」と命名した。第 5 因子は ATAS の原版の「曖昧さの受容」の 3 項目で構成されているため,「曖昧さの受容」と命名した。因子間相関は「曖昧さの統制・排除(因子 1）)と「曖昧さの享受（因子 2)」間に r=.29 ,「曖昧さへの積極関与（因子 3)」間に r=.40 の相関が見られた。「曖昧さの享受(因子 2)」と「曖昧さへの積極関与（因子)」との間に r=.41,「曖昧さの受容（因子 5)」の間に r=.26 の相関が見られた。「曖昧さへの積極関与（因子 3)」と「曖昧さの受容（因子 5)」の間に r =－.23 の相関が見られた。

表 2-5　ATAS の因子分析結果

ATASの因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
曖昧さの統制・排除					
8　どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ。	.774				
18 どっちつかずであることはよくないと思う。	.728				
5　一貫していないことには信頼がおけない。	.607				
10 情報がたりないと正確な判断はできない。	.503				
16 情報がたりないと動きづらいので、できるだけ情報を集めたい。	.479				
曖昧さの享受					
20 いくつかの解釈ができると、いろいろな角度からものごとを見られる点では自由な感じがする。		.855			
3　不完全なところも、ある程度受け入れられる。		.560			
19 いろいろな可能性がある時には、さまざまなことを考慮して対処法を考えておきたい。		.524			
1　いくつかの解釈ができると、視野の可能性が広がっていくのでおもしろい。		.515			
22 いろいろな可能性があると選べるのでうれしい。		.483			
14 不完全なことは、完全にしていくプロセスがあっておもしろい。		.415			
曖昧さへの積極的関与					
26 確実でないところは確認して明らかにしたい。			.669		
7　いろいろな可能性があると、すべて試してみたくなる。			.640		
21 はっきりしないことはできるだけ白黒つけたい。			.636		
4　はっきりしていないことがあっても、そのままにしておくのがいい。			-.631		
6　見たことがないものには想像力がかきたてられる。			.501		
9 見たことがないものは見ておくにこしたことはないので、ぜひ見てみたい。			.359		
曖昧さへの不安					
2　はっきりしない状況におかれると不安になる。				.837	
24 はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる。				.658	
25 情報が多すぎると、かえって頭が混乱してしまう。				.513	
15 見たことがないものに出会うと怖くなる。				.383	
曖昧さの受容					
11 はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある。					.751
12 不完全なことがあるからおもしろい。					.701
17 不完全なままにしておいた方がよい時もある。					.538

因子間相関	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
因子1	-	.29	.40	.11	.02
因子2		-	.41	.18	.26
因子3			-	.09	-.23
因子4				-	.10
因子5					-

IIAS-R・ATAS の因子分析（表 2－6）

IIAS-R・ATAS の全 43 項目について因子分析を行った。因子の抽出は主因子法で，プロマックス回転により行った。因子数 1 で初期値を求め，スクリー基準によって因子数を想定し分析を行っていった。その結果，5 因子解を選択した。どの因子にも負荷量が.40 に満たない 6 項目を除いて，37 項目により再度，主因子・プロマックス回転による因子分析を

行った。最終的な因子分析結果の因子負荷量，及び因子間相関を表 2－6 に示した。項目 15 “見たことがないものに出会うと怖くなる”は負荷量が 2 つの因子において.40 以上あったが，項目の削除が少ない方が適当と考え，残した。

第 1 因子は 14 項目中 13 項目が IIAS-R の項目で構成されていたことから，「対人場面における曖昧さへの非寛容」と命名した。第 2 因子は 8 項目すべてが ATAS の項目で構成されている。本章で行った ATAS の因子分析結果の曖昧さの統制・排除（因子 1)”の 5 項目（A5,A8,A10,A16,A18）のすべてが含まれ，負荷が高いことから「曖昧さの統制・排除」と命名した。第 3 因子は 5 項目すべてが ATAS の項目から構成されている。また，前述の因子分析の結果の「曖昧さへの積極的関与(因子 3)の項目で構成されていることから，同じく「曖昧さへの積極的関与」と命名した。第 4 因子は 4 項目すべてが前述の ATAS の「曖昧さの受容（因子 5)」の項目で構成されていたので，同様に「曖昧さの受容」と命名した。第 5 因子は 6 項目中 4 項目が ATAS の「曖昧さへの不安(因子 4)」の項目で構成され, IIAS-R の項目 3“隣人と出会った時，お互い顔は知っているのに，あいさつしてよいのかどうか迷います。”の負荷量も高いことから，「曖昧さへの不安」と命名した。因子間相関は「対人場面における曖昧さへの非寛容（因子 1)」因子と「曖昧さへの不安（因子 5)”間の相関が」r =.43 と高く，“曖昧さの統制・排除（因子 2)”と「曖昧さへの積極的関与（因子 3)」と間に r=.34 の相関が見られた。曖昧さへの積極的関与（因子 3)」と「曖昧さの受容（因子 4)」との間には r=－.29 の相関が見られた。

表 2-6　IIAS-R・ATAS 尺度の因子分析結果

IIAS-R・ATAS尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
対人場面における曖昧さへの非寛容					
I 1　見ず知らずの人と一緒にいる時、私に対してどのように振舞うのか予想がつかないと、とまどってしまいます。[a)]	.862				
I 13 がさつな友人は、いつもこちらに対する行動の意図がわからないので、はっきりして欲しいです。	.686				
I 6　友達の友達に会った時、どうすべきか迷います。	.626				
I 8　初対面の人と、お互いを探り合いながら話します。	.607				
I 7　初対面の人に、どの程度親しく接してよいのかとまどいます。	.598				
I 10　初対面の人とするあいさつは、あいまいで困ります。	.577				
A 24 はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる。[b)]	.565				
I 5　私に対する人物評が、私の親友達の間で対立する時は、とても困ります。	.538				
I 2　あいさつぐらいしかしない人をその日、二度目に見かけた時、どう接してよいのかわかりません。	.527				
I 16　昔の知人とあいさつをかわすのは、緊張します。	.524				
I 12　初対面の人と2人きりでいる時、話をするべきかどうか、とまどいます。	.497				
I 11　中途半端に親しい友人の発言は、はっきりしないことが多いので困ります。	.493				
I 4　友達の買い物に付き合って物を選ぶ時は、何が欲しいかはっきりして欲しいです。	.408				
I 15　友人が私の側にいて携帯電話で話していると、私はその話の内容が気になります。	.337				
曖昧さの統制・排除					
A 8　どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ。		.814			
A 18　どっちつかずであることはよくないと思う。		.728			
A 10　情報がたりないと正確な判断はできない。		.618			
A 5　一貫していないことには信頼がおけない。		.591			
A 16　情報がたりないと動きづらいので、できるだけ情報を集めたい。		.507			
A 9　見たことがないものは見ておくにこしたことはないので、ぜひ見てみたい。		.492			
A 14　不完全なことは、完全にしていくプロセスがあっておもしろい。		.483			
A 19　いろいろな可能性がある時には、さまざまなことを考慮して対処法を考えておきたい。		.399			
曖昧さへの積極的関与					
A 7　いろいろな可能性があると、すべて試してみたくなる。			.700		
A 6　見たことがないものには想像力がかきたてられる。			.672		
A 1　いくつかの解釈ができると、視野の可能性が広がっていくのでおもしろい。			.624		
A 26　確実でないところは確認して明らかにしたい。			.602		
A 21　はっきりしないことはできるだけ白黒つけたい。			.481		
曖昧さの受容					
A 12　不完全なことがあるからおもしろい。				.635	
A 17　不完全なままにしておいた方がよい時もある。				.626	
A 11　はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある。				.600	
A 3　不完全なところも、ある程度受け入れられる。				.409	
曖昧さへの不安					
I 3　隣人と出会った時、お互い顔は知っているのに、あいさつしてよいのかどうか迷います。					.579
A 25 情報が多すぎると、かえって頭が混乱してしまう。					.542
A 23 見たことがないものにすぐ近寄るのは抵抗がある。					.537
A 15 見たことがないものに出会うと怖くなる。				.453	.462
I 14「知人」程度の人と出会うと、お互い気付かないフリをしてしまい気まずいです。					.458
A 22 いろいろな可能性があると選べるのでうれしい。					-.402

因子間相関

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
因子1	-	.08	-.05	.14	.43
因子2		-	.34	-.10	.02
因子3			-	-.29	-.03
因子4				-	.01
因子5					-

注. a) I：IIAS-Rの下位尺度
b) A：ATASの下位尺度
項目に附した番号は質問紙上での番号を示す。

2-4　考察

本章の目的は, ①IIAS-R の測定する AT が intolerance の測定に主眼が置かれ, tolerance が測定されていないという問題，②IIAS-R と ATAS の両者の共通性と，多次元性について検討することであった。

2-4-1　相関分析

仮説検証

仮説 1．IIAS-R の下位尺度は，ATAS の「曖昧さへの不安」,「曖昧さの排除」といった曖昧さへの否定的態度と正の相関を示し,「曖昧さへの享受」,「曖昧さの受容」といった肯定的態度と負の相関を示す。

IIAS-R，ATAS の下位尺度間の相関分析を行ったところ，IIAS-R の下位尺度は ATAS の下位尺度の「曖昧さへの不安」との間に正の相関が見られた(r =.34～58)。この結果から IIAS-R が測定する曖昧さへの非寛容と関連がある曖昧さへの態度の側面は“不安”であることが示された。特に「初対面の関係におけるあいまいさへの非寛容」,「半見知りの関係におけるあいまいさへの非寛容」との間の相関が高かった。対人関係の初期，また，特に親しくない関係においては相手の情報が少なく，曖昧さが多く存在し，それが曖昧さへの“不安”という態度と結びつくのではないかと考えられる。一方で曖昧さへの否定的な態度といえる「曖昧さの排除」との有意な相関は認められなかった。これは IIAS-R の尺度項目の表現によるものだと思われる。友野・橋本(2005)は Budner (1962)の定義を参考に，曖昧さに非寛容な者がとると思われる反応の記述を「気になる，落ち着かない，とまどう」といったものからランダムに，自由記述で収集された対人場面の曖昧な状況に付け加え，尺度項目を作成したとしている。これらの表現は“白黒つけたい”,“はっきりさせるべきだ”といった ATAS の“曖昧さの排除”の態度とは結びつきにくいと考えられる。友野・橋本（2005）が Budner (1962)の定義をどのように参考にしたかは，わからないが，Budner(1962)は，曖昧さへの恐れに対する反応を 2 つに分類している。一つは“服従(submission)”で，もう一つは“否認（denial)”である。「気になる，落ち着かない，とまどう」といった反応が“否認”とは考えにくい。この点で，IIAS-R は曖昧さに intolerant な者の反応を網羅的に提示しているか疑問が残る。西村(2007)の ATAS と増田（1998）の「心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度」の相関分析では「曖昧さへの不安」との相関は r

=.51,「曖昧さの排除」とは r=.25,「曖昧さの統制」とは r=.27,「曖昧さの受容」とは r=.－.19 であった。一方，IIAS-R は 「曖昧さの享受」や「曖昧さの受容」といった曖昧さに対する肯定的な態度との間に負の相関は認められなかった。

これらをふまえ考察すると，仮説 1 は支持されなかったと言える。IIAS-R の下位尺度は「曖昧さへの不安」と正の相関は示したものの，ATAS の他の下位尺度との相関は示さなかった。また，肯定的な態度と負の相関を示さなかったことから，IIAS-R は曖昧さへの intolerance を測定する尺度であり, tolerance を測定するものではないことが結論づけられた。つまり，IIAS-R の得点が低いとしても，それは曖昧さに tolerant であるということではなく，intolerant ではないということを意味する。

2-4-2　因子分析

仮説検証

仮説 2. 場面を抽象化し作成された ATAS と具体的場面に限定し作成された IIAS-R の尺度項目には概念的に共通性があるとともに，複数の因子において両尺度の項目が混在する。

まず，はじめに IIAS-R, ATAS 個別の因子分析について考察を行い，次に全項目による因子分析の考察を行う。

因子分析の結果は，IIAS-R の多次元構造を示すものであった。IIAS-R の原版のように，人間関係の段階により，因子構造が明確に分かれることはなかったが，第 1 因子に「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」の項目が集中し，「友人関係における曖昧さへの非寛容」の項目は含まれなかった。一方で第 2 因子，第 3 因子には「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」の項目はなかった。つまり，初対面の関係における曖昧さと友人関係における曖昧さは質が異なることを意味する。Budner (1962)は曖昧な状況を新奇性(novelty), 複雑性(complexity)，不可解性(insolubility)の 3 つに分類しているが，初対面の関係における曖昧さは，よく知った手がかりがない“新奇性”と解釈できる，友人関係における曖昧さは，手がかりがありすぎる“複雑性”や，それぞれの要素や手がかりが異なった事態を招くような矛盾した“不可解性”と解釈することができるのではないかと考えられる。例えば，第 1 因子の項目 7“初対面の人に，どの程度親しく接してよいのかとまどいます。”に含まれる曖昧さは，相手に対する情報が少ないということから，想定される曖昧さは“新

奇性”と考えることができる。第 2 因子の項目 5“私に対する人物評が，私の親友達の間で対立する時は，とても困ります”で想定される曖昧さは矛盾した要素を含む“不可解性”と考えられる。友野・橋本（2005）は IIAS-R の下位尺度を人間関係の形成過程による 3 因子モデルを採用しているが，曖昧さの質により分類できないだろうか。本章の IIAS-R の因子分析では第 2 因子，第 3 因子の項目数が少なく Budner(1962)の曖昧さの分類と一致するとは言い難いが，第 1 因子に関しては新奇性の曖昧さに対する非寛容を測定する項目で構成されていると解釈できる。

ATAS の因子分析の結果，原版と同様の 5 因子構造が示された。第 1 因子は，原版の「曖昧さの排除（8,18）」，「曖昧さの統制（5,10,16）」の項目から構成された。いずれの項目も曖昧さを否定的に捉え，曖昧さを減少させようとする態度と言える。第 2 因子は 6 項目中 4 項目が原版の「曖昧さの享受」因子の項目で構成されており，曖昧さを肯定的に捉える態度の項目で構成されている。第 4 因子は原版の「曖昧さへの不安」因子の 4 項目（2,15,24,25）で構成された。第 5 因子も 3 項目(11,12,17)ではあるが，原版の「曖昧さの受容」因子の項目で構成された。本章での因子分析の結果は，ATAS 原版の因子構造と部分的には同様であった。しかしながら，原版の「曖昧さへの享受」因子と「曖昧さの統制」因子は複数の因子に分かれ，再構成された。特に本章で行った分析結果の第 3 因子の「曖昧さへの積極的関与」は，曖昧さへの態度としては，肯定的態度・否定的態度の項目が混在している因子となっている。原版の「曖昧さへの不安」以外の 4 因子で構成されている。このことから，第 3 因子の「曖昧さへの積極的関与」は，単純に肯定的・否定的という二元的な態度ではなく，好悪に関係なく曖昧さに対して無関心ではいられないという態度を共通性として持った因子と言える。

IIAS-R・ATAS 全項目の因子分析の結果，両尺度の因子構造は非常に明瞭に区分された。第 1 因子は 14 項目中 13 項目が IIAS-R の項目から構成され，第 2 因子，第 3 因子，第 4 因子は ATAS の項目のみで構成され，因子構造も概ね同じものとなった。第 5 因子の“曖昧さへの不安”のみが ATAS の 4 項目と IIAS-R の 2 項目で両尺度の項目が混在した。西村(2007)は ATAS の作成にあたり，曖昧さへの態度の多側面に焦点をあてるために場面の抽象度を高めた。一方，IIAS-R は場面を具体的に限定して作成された。ATAS が曖昧さの場面を抽象化したのであれば，その中には，IIAS-R が対象とする対人場面における曖昧さも包含されるべきであろう。つまり，IIAS-R と ATAS の全項目で因子分析を行えば，ATAS の項目と IIAS-R の項目が混在した因子が構成されることになるはずである。しかしながら，

本研究における因子分析の結果では，IIAS-R と ATAS の尺度項目は明確に独立した因子を形成した。これは IIAS-R と ATAS が異なるものを測定していることを示す。因子分析の結果からは，抽象度を高めた曖昧な場面を設定した ATAS は IIAS-R のように対人場面に限定した曖昧さへの態度を測定できるとは言い難い。このことは，一般的な(場面限定をしていない)AT 測定尺度の，個別の場面・状況に対する網羅性を慎重に検討する必要があることを意味し，また逆に，場面を限定した AT 測定尺度を一般的な AT と同一視することの危険性を示している。

因子分析の結果，仮説 2 は支持されなかったと言える。IIAS-R と ATAS は別々の因子群を構成した。理由としては，測定する曖昧さの対象の違いが考えられる。IIAS-R は対人場面における曖昧さであって，曖昧さの対象は自分と相手に存在する。一方で，ATAS で表現されている曖昧さの対象は，人ではなく物や現象に対するものである。こうした曖昧さの対象の違いが回答にも差をもたらし，因子構造の違いとなって現れたのではないかと考えられる。

2-5　まとめ

本章の目的は，①IIAS-R の測定する AT が intolerance の測定に主眼が置かれ，tolerance が測定されていないという問題，②IIAS-R と ATAS の両者の共通性と，多次元性について検討することであった。そのために両尺度の比較分析を行った。IIAS-R と ATAS の相関分析から，IIAS-R が測定する曖昧さへの非寛容さは「曖昧さへの不安」とのみ相関を示すことがわかった。曖昧さへの肯定的な態度である「曖昧さの享受」や「曖昧さの受容」との間に有意な負の相関を示さなかったことから，IIAS-R は曖昧さへの Intolerance を測定するが Tolerance を測定するものではないことがわかった。因子分析において IIAS-R は多次元構造を示した。基本的には IIAS-R の原版同様，人間関係の形成段階別の 3 因子構造を抽出したが，これは新奇性や複雑性といった“曖昧さ”の質の違いにより構造化したとも考えられる。相関分析の結果と合わせて考えると IIAS-R の多次元構造は“ambiguity”の質によるもので，“tolerance”の質によるものではないことが考えられる。また，場面を抽象化した曖昧さへの反応（ATAS）と，対人場面における曖昧さへの反応(IIAS-R)は異質のものであることが因子分析により，示唆された。Frenkel-Brunswik(1949)以来，AT は個人の包括的なパーソナリティ特性として，知覚的反応から社会的適応行動にいたるまで，多くの関連が示されてきた。先行研究では，曖昧さの質については十分に考慮されることなく

尺度が作成され使用されてきた。つまり，知覚レベルの曖昧さも社会的場面における曖昧さも同様に扱われてきた。しかしながら，本章の結果は，個人の曖昧さに対する反応は，すべての曖昧さに対して一様ではなく，曖昧さの質により異なることを示している。つまり AT と一口に言っても，曖昧さの対象が人であるか，そうでないかで，個人の曖昧さへの反応・態度は異なると考えられる。例えば，対人場面における曖昧さを恐怖と感じる個人が，状況や現象に対する曖昧さにも同様に恐怖を感じるとは限らないということである。過去の AT 研究における知見を見る際には，使用された AT 測定尺度が，どのような曖昧さを想定したものであるか，注意する必要がある。Frenkel-Brunswik(1949)は AT が知覚や感情とも関連する包括的な性格特性としてとらえているが，実際は，種々の曖昧な状況での特性と考えられる。

本章の結果から，AT を多面的に測定するには，現時点では，IIAS-R と ATAS を併用することが望ましいと考えられる。第 3 章では，曖昧な場面の一つと考えられる，日本人大学生の留学生との接触場面を例にとり，日本人大学生の AT と異文化接触時の行動との関連を検討する。

第3章　日本人大学生の AT と異文化接触時の行動との関連の検討

先行研究においては，AT と他の認知，感情レベルの心理学的変数との関連を示した研究は多いが，行動レベルで AT との関連を検討した研究は，ほとんど見られない。例えば，吉川(1986)は Norton(1975)の MAT-50 の邦訳版で測定した AT と知的パフォーマンス課題との関連の検討を行った。結果は，AT の高低による正答数の差は見られなかったが，AT が低い者が高い者に比べ誤答数が有意に多かったとしている。また，Zenasni et al.(2008)は MAT-50 を元に作成された AT 測定尺度で測定された AT と創造性との関連を検討するにあたり，物語を書かせる課題を行っている。その結果，AT が高い者の方が，低い者に比べ創造性が高かったとしている。これらは認知，感情レベルの変数ではないがいずれも，課題遂行的なものであり，日常の曖昧な場面での行動とは性質が異なると考えられる。また，先行研究では一次元構造を想定した AT 尺度得点と他の変数との関連研究が大半である。AT 概念の現実場面での応用を考えると，日常の曖昧な場面における行動と前章で示された多次元構造の AT 測定尺度得点との関連を検討する必要があるだろう。そこで，本章では，日本人大学と留学生との接触場面を曖昧な場面の例とし，日本人大学生の AT と留学生との接触時の行動との関連を検討する。そのために本章では，日本人大学生の AT，過去の異文化滞在経験の有無，留学生交流サークル所属の有無，留学生との会話経験の有無，留学生の友人の有無及び友人形成意欲の有無を調査し，過去の異文化滞在経験の有無，留学生との接触行動の有無による AT の下位尺度得点の平均値の差を検討する。これにより，AT と異文化接触時における行動との関連の検討を行う。

3-1　目的

米田（2008）は，大学内で留学生の生活・学習をサポートする日本人チューターの資質としての AT の検討を行った。その結果，日本人チューターの留学生との接触頻度と IIAS-R によって測定したチューターの AT との間に有意な相関関係が見られた。つまり，曖昧さに intolerant なチューターほど，留学生と会っていないことがわかった。このことから，留学生との接触場面は日本人チューターにとって曖昧な場面であることが示唆された。日本人大学生にとって，同じ文化的背景を持つ日本人とのコミュニケーションに比べ，留学生とのコミュニケーションは相手の言語を十分に理解していないことや，文化的慣習を知らないことから，十分な意思疎通が難しいことが想定される。このような異文化接触は曖昧な

場面の好例と考えられる。曖昧な場面の好例と考えられる留学生との接触において，AT の高低と接触時の行動には何かしらの関連があると予想される。そこで，日本人大学生の AT と留学生との接触時の行動との関連を検討することが本章の目的である。留学生との接触場面は，日本人大学生同士の接触に比べ，相手に対する情報が少なく，はっきりしないことが多いことは想像できる。これは，チューターのような特定の役割を与えられた学生に限らず，一般の学生にとっても同様と考えられる。よって日本人学生と留学生との接触場面を曖昧な場面とし調査を行う。

AT と留学生との接触行動との関連を検討するにあたり，過去の異文化滞在経験の有無と AT の関連の検討も行った。日本人大学生の中には過去に海外旅行や留学等の異文化での滞在経験をもつ者がいると考えられる。そのような滞在においては外国人との接触があることが想定される。これも留学生との接触同様，曖昧な場面と考えられる。そこで，“海外滞在経験（留学を除く）”，“留学経験の有無”も同時に調べ，AT の差を検討する。加えて，留学生との接触行動については，以下の点に留意した。日本人大学生の中には留学生との交流を目的とする留学生交流サークルに所属する学生がいる。こうした学生は日本人学生の中でも留学生との交流を望んでいると考えられる。この点と AT との関連を見るために留学生交流サークルの所属の有無による AT の差も検討する。留学生との接触行動の指標として“留学生との会話経験の有無”と“留学生の友人の有無”を尋ねる。会話経験の有無においては，会話の内容については聞いていない。つまり，あいさつ程度でも，悩みごとの相談でも“会話”ということになる。そこで，留学生の友人の有無を聞くことにする。友人関係を形成するためには，ある程度の質（例えば自己開示）と量の相互作用が必要になる。つまり，友人がいる者は友人がいない者より相互作用を行っていると考えられる。よって接触行動の指標になると考えた。また，友人がいない者については，留学生の友人を作りたいと思っているかどうかを尋ねている。これは“友人関係形成意欲”の有無として AT を比較する際の群分けの基準とした。また，留学生交流サークルに所属する学生は留学生と接する機会も自動的に増えると考え，留学生との接触と AT の関連を見る際には，サークルの所属の有無と接触行動の有無によるクロス集計を行い各群の AT の差を検討する。

3-1-1　仮説

1 章で述べたように，特定の集団間の AT を比較した先行研究では，曖昧さに intolerant である者は，保守的で，文化的なルールに対し教条主義的であり，一方，曖昧さに tolerant な者は，進歩的であり，特定の性役割に固執せず，文化的ルールに対し広い解釈を持つこ

とが示されている（Pawlicki & Almquist, 1973; Rotter & O'Connell, 1982）。そうであるとすれば, 異文化接触行動の多い集団は, 少ない集団に比べ AT のポジティブな側面が強く, AT のネガティブな側面は弱いであろうと考える。そこで調査を実施するにあたり以下の仮説を立てた。

仮説 1.　異文化滞在経験のある者は, 滞在経験がない者に比べ, ATAS の「曖昧さの享受」,「曖昧さの受容」といった AT のポジティブな側面の得点が高く，ATAS の「曖昧さへの不安」,「曖昧さの排除」，IIAS-R といった AT のネガティブな側面の点数は低い。

仮説 2.　留学生交流サークルに所属する者は，所属しない者に比べ，ATAS の「曖昧さの享受」,「曖昧さの受容」といった AT のポジティブな側面の得点が高く，ATAS の「曖昧さへの不安」,「曖昧さの排除」，IIAS-R といった AT のネガティブな側面の点数は低い。

仮説 3.　留学生との接触経験のある者は，ない者に比べ，ATAS の「曖昧さの享受」,「曖昧さの受容」といった AT のポジティブな側面の得点が高く，ATAS の「曖昧さへの不安」,「曖昧さの排除」，IIAS-R といった AT のネガティブな側面の点数は低い。

3-2　調査対象と方法

調査対象は近畿地区の国立大学，私立大学に在籍する人文・社会科学系学部に所属の日本人大学生 110 名（男性 40 名，女性 70 名，平均 19.9 歳，SD＝4.0）であった。これは第 2 章で記述した調査対象者 99 名に，さらに 11 名の調査対象者を加えたものである。110 名のうち，留学生サークルに所属している学生は 23 名，所属していない学生は 87 名であった。調査期間は 2009 年 10 月～12 月である。質問紙は授業中, サークル活動中に配布され, その場で実施回収した。質問紙の構成は 1．フェイスシート 2．留学生との交流に関する質問：留学生交流サークルへの所属の有無，留学生との会話の経験の有無，留学生の友人の有無，留学生との友人関係形成意欲の有無，3．曖昧さへの態度尺度（ATAS），4．改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度(IIAS-R)の順とした。尚，質問紙は「留学生との交流に関する調査」という名目で行った。質問紙については論文末に資料として附す。

3-3　結果

表 3-1 に調査対象者の属性と留学生との接触に関する回答の集計を示した。

表 3-１　調査対象者の属性

性別	男性　40名	女性　70名		
平均年齢	19.9　歳（18歳～64歳）			
海外での滞在経験（留学を除く）	なし　74名	3か月未満　33名	1年以上　3名	
留学経験	なし　96名	3か月未満　12名	3～6か月　1名	不明　1名
留学生交流サークルへの所属	所属している　23名	所属していない　87名		
留学生との会話経験	あり　40名	なし　70名		
留学生の友人の有無（会話経験あり）	いる　31名	いないが作りたい　7名	いない　2名	
留学生との友人関係形成への意欲	あり　39名	なし　31名		

ATAS と IIAS-R の下位尺度ごとの得点の平均値を算出し分析に用いた。各下位尺度のα係数は，曖昧さの享受はα＝.79，曖昧さへの不安はα＝.69，曖昧さの受容はα＝.69，曖昧さの統制はα＝.67，曖昧さの排除はα＝.78，初対面の関係における曖昧さへの非寛容はα＝.82，半見知りの関係における曖昧さへの非寛容はα＝.66，友人関係における曖昧さへの非寛容はα＝.67 であった。

海外滞在経験・留学経験の有無による AT の差の検討

海外滞在経験（留学を除く）のある学生と無い学生，留学経験のある学生と無い学生の AT の差を検討するために t 検定を実施した。海外滞在経験（留学を除く）の有無による AT の下位尺度の有意な差は見られなかった。留学経験の有無では，“初対面の関係における曖昧さへの非寛容”が有意傾向ではあるが留学経験無し群の方が高かった(t (107)=1.82, p<.10)。

留学生交流サークルの所属の有無による AT の差の検討

留学生交流サークルに所属している学生と所属していない学生の AT の差を検討するために t 検定を実施した。その結果を表 3-2 に示した。“初対面の関係における曖昧さへの非寛容”のみ有意傾向ではあるがサークル無所属群の方が高かった(t(108)=1.96, p<.10)。

表 3- 2　サークル所属群・無所属群の AT 下位尺度の平均値と標準偏差

	所属	無所属		
	平均値 SD	平均値 SD	t値	自由度
曖昧さの享受	32.05（4.70）	30.34（5.25）	1.39	105
曖昧さへの不安	23.04（4.64）	23.72（4.58）	−0.63	106
曖昧さの受容	19.14（4.11）	18.66（3.68）	0.53	105
曖昧さの統制	21.43（3.13）	21.67（3.62）	−0.28	106
曖昧さの排除	11.30（2.84）	11.68（3.15）	−0.52	108
初対面の関係における曖昧さへの非寛容	22.61（7.29）	26.02（7.44）	−1.96 †	108
半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	23.13（5.55）	25.26（5.94）	−1.55	106
友人関係における曖昧さへの非寛容	18.13（5.83）	19.03（5.44）	−0.70	107

注. †p<.10

会話経験の有無による AT の差の検討

留学生との会話経験の有無による AT の差の検討を行うにあたり，サークル所属の有無も同時に考慮した。サークルに所属している場合とそうでない場合では，調査対象者の AT にかかわらず会話する機会に差があると考え，会話経験の有無とサークル所属の有無をクロス集計し，それぞれの群間の AT の差を検討することにした。クロス集計表を表 3-3 に示す。

表 3- 3　サークル所属×会話経験のクロス集計表

	会話経験有	会話経験無し	合計
サークル所属	21(12)	2(1)	23(13)
サークル無所属	19(10)	68(47)	87(57)
合計	40(22)	70(48)	110(70)

注.（ ）は女性

留学生交流サークルに所属していて，会話経験の無い者は 2 人と極端に少なかったため分析から除外し，サークルに所属し会話経験がある群，サークルに無所属で会話経験がある群，サークルに無所属で会話経験がない群の 3 群に分け AT を従属変数とした一元配置の分散分析を行った(表 3-4)。尚，以下の結果の記述では便宜上，留学生交流サークルに所属し会話経験の有る群を 1 群，留学生交流サークルに所属していないが，会話経験のある群を 2 群，留学生交流サークルに所属せず，会話経験のない群を 3 群とした。

表 3-4　サークル所属・会話経験の有無別 AT 下位尺度の平均と分散分析結果

	1群 サークル所属・会話経験有		2群 サークル無所属・会話経験有		3群 サークル無所属・会話経験無し			
	平均値 (*SD*)	n	平均値 (*SD*)	n	平均値 (*SD*)	n	*F*値	
曖昧さの享受	32.60 (4.54)	20	31.05 (6.19)	19	30.14 (4.98)	66	$F(2,102)=$ 1.80	
曖昧さへの不安	23.05 (4.85)	21	20.68 (5.22)	19	24.59 (4.01)	66	$F(2,103)=$ 5.98	***
曖昧さの受容	19.25 (4.29)	20	19.32 (3.70)	19	18.47 (3.68)	66	$F(2,102)=$ 0.56	
曖昧さの統制	21.43 (3.28)	21	21.89 (4.27)	19	21.61 (3.44)	66	$F(2,103)=$ 0.09	
曖昧さの排除	11.33 (2.96)	21	11.32 (3.70)	19	11.78 (3.00)	68	$F(2,105)=$ 0.27	
初対面の関係における曖昧さへの非寛容	22.48 (7.61)	21	21.84 (6.47)	19	27.19 (7.31)	68	$F(2,105)=$ 6.09	***
半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	23.19 (5.82)	21	23.11 (4.79)	18	25.84 (6.11)	67	$F(2,103)=$ 2.59	
友人関係における曖昧さへの非寛容	18.00 (6.07)	21	16.11 (6.06)	18	19.81 (5.03)	68	$F(2,104)=$ 3.62	*

注1. $^{*}p<.05$, $^{***}p<.001$
注2. Tukey法による多重比較の結果、有意差がみられた群を*F*値の右に示した($p<.05$)

結果から「曖昧さへの不安」,「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」,「友人関係における曖昧さへの非寛容」の主効果が認められた。(曖昧さへの不安：F (2,103)=5.98,p <.001; 初対面の関係における曖昧さへの非寛容：F(2,105)=6.09,p <.001; 友人関係における曖昧さへの非寛容：F(2,104)=3.62,p <.05)。多重比較（Tukey 法）の結果,“曖昧さへの不安”は 3 群の学生が 2 群の学生より有意に高かった。“初対面の関係における曖昧さへの非寛容”は 3 群の学生が 1 群の学生，2 群の学生より有意に高かった。“友人関係における曖昧さへの非寛容”は 3 群の学生が 2 群の学生より有意に高かった。

留学生の友人の有無及び友人関係形成意欲の有無による AT の差の検討

会話経験の有無による AT の差の検討と同様に, 留学生の友人の有無とサークル所属の有無をクロス集計し，それぞれの群間の AT の差を検討することにした。クロス集計表を表 3-5 に示す。

表 3-5　サークル所属×友人の有無のクロス集計表

	友人有り	友人無し	合計
サークル所属	19(11)	4(2)	23(13)
サークル無所属	12(7)	75(50)	87(57)
合計	31(18)	79(52)	110(70)

注.（ ）は女性

留学生交流サークルに所属していて，友人のいない者は 4 人と少なかったため分析から除外した。サークルに所属し友人がいる群，サークル無所属で友人がいる群の 2 群に加え，サークル無所属で友人がいない群を友人形成意欲がある群，ない群の 2 群に分け，計 4 群で AT を従属変数とした一元配置の分散分析を行った(表 3-6)。尚，結果の記述の便宜上，留学生交流サークルに所属し，留学生の友人がいる群を 1 群，留学生交流サークルに所属していないが留学生の友人がいる群を 2 群，留学生交流サークルに所属せず，留学生の友人はいないが，友人関係形成意欲がある群を 3 群，留学生交流サークルに所属せず，留学生の友人もおらず，友人関係形成意欲がない群を 4 群とした。

表 3- 6　サークル所属・友人の有無・友人関係形成意欲別 AT 下位尺度の平均と分散分析結果

	1群		2群		3群		4群		
	サークル所属・友人有り		サークル無所属・友人有り		サークル無所属・友人無し・友人関係形成意欲有り		サークル無所属・友人無し・友人関係形成意欲無し		
	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)	n	F値
曖昧さの享受	32.22 (4.58)	18	30.42 (7.42)	12	31.39 (4.01)	41	28.97 (5.56)	32	$F(3,99)=$ 2.03
曖昧さへの不安	22.53 (4.71)	19	20.50 (5.60)	12	24.69 (3.35)	42	23.65 (5.13)	31	$F(3,100)=$ 3.11 *
曖昧さの受容	19.00 (4.26)	19	18.58 (4.32)	12	18.07 (3.19)	42	19.48 (3.99)	31	$F(3,100)=$ 0.88
曖昧さの統制	21.42 (3.45)	19	22.25 (4.96)	12	21.95 (3.35)	41	21.09 (3.42)	32	$F(3,100)=$ 0.49
曖昧さの排除	11.32 (3.11)	19	12.25 (3.74)	12	11.83 (2.84)	42	11.27 (3.35)	33	$F(3,102)=$ 0.41
初対面の関係における曖昧さへの非寛容	21.79 (7.50)	19	19.83 (6.16)	12	27.40 (6.74)	42	26.52 (7.77)	33	$F(3,102)=$ 5.38 **
半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	22.74 (5.92)	19	23.27 (5.87)	11	25.32 (4.75)	41	25.85 (7.20)	33	$F(3,100)=$ 1.45
友人関係における曖昧さへの非寛容	18.74 (5.67)	19	15.91 (6.25)	11	19.86 (4.16)	42	19.03 (6.32)	33	$F(3,101)=$ 1.56

注1. $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$
注2. Tukey法による多重比較の結果、有意差がみられた群をF値の右に示した($p<.05$)

結果から，「曖昧さへの不安」，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」の主効果が認められた（曖昧さへの不安：$F(3,100)=3.11$, $p<.05$; 初対面の関係における曖昧さへの非寛容：$F(3,102)=5.38$, $p<.001$）。多重比較（Tukey 法）の結果，「曖昧さへの不安」は 3 群の学生が 2 群の学生より有意に高かった。「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」は 3 群の学生が，1 群，2 群の学生より有意に高かった。また，4 群の学生が 2 群の学生より有意に高かった。

3-4　考察

仮説検証

仮説 1.　異文化滞在経験のある者は，滞在経験がない者に比べ，ATAS の「曖昧さの享受」，「曖昧さの受容」といった AT のポジティブな側面の得点が高く，ATAS の「曖昧さへの不安」，「曖昧さの排除」，IIAS-R といった AT のネガティブな側面の点数は低い。

海外滞在経験，留学経験の有無による AT の差の検討

過去の異文化滞在経験の有無による AT の差は，留学経験のある学生と無い学生との間で見られた。留学経験の無い学生の方が，経験のある学生に比べ「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」が有意に高い傾向が見られた。これにより，初対面の関係における曖昧さへの非寛容さと留学経験との関連が示された。

一方で，留学ではない海外滞在経験の有無による AT の差が見られなかった。これは，対人場面の質が異なるためと考えられる。今回の調査では，どのような理由で海外滞在をしたかについては，具体的には聞いていないが，例えば，観光を目的とした海外旅行であれば，対人場面の頻度が留学に比べ少ないであろう。また，ガイドがついていたり，もしくは同行する人が現地に詳しい人であれば，仮に曖昧な対人場面に遭遇したとしても，サポートを得ることができるであろう。また，旅行や親の仕事の関係で海外に滞在した場合，付き合いや強制的な滞在とも考えられ，今回調査した日本人大学生の AT とは関連がない滞在例もあり得るであろう。よって，AT の差が見られなかったと考えられる。

留学経験のある学生の「曖昧さへの不安」は留学経験の無い学生に比べ低いという結果は，仮説 1 を支持するものであった。しかし，他の下位尺度において差が見られなかったことから仮説 1 の大部分は支持されなかった。

仮説 2.　留学生交流サークルに所属する者は，所属しない者に比べ，ATAS の「曖昧さの享受」，「曖昧さの受容」といった AT のポジティブな側面の得点が高く，ATAS の「曖昧さへの不安」，「曖昧さの排除」，IIAS-R といった AT のネガティブな側面の点数は低い。

留学生交流サークルの所属の有無による AT の差の検討(表 3-2)

留学生交流サークルに所属している学生は，所属していない学生に比べ，初対面の関係における曖昧さに対して非寛容ではない傾向が見られた。留学生交流サークルに所属するということは，たいていの場合，留学生との交流に多少なりとも魅力を感じ，交流を望んでいると考えられるが，それが曖昧さを魅力的なものと評価する傾向である「曖昧さの享受」の差としては表れていない。つまり，AT のポジティブな側面と留学生交流サークルに所属することとの関連は示されなかった。留学生交流サークルに所属している人の特徴として，曖昧さに intolerant では無い人が多いと考えることができる。

留学生交流サークルに所属している学生の「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」は無所属の学生に比べ低かったことから，仮説 2 の一部は支持されたが，他の下位尺度においては差が見られず，仮説 2 全体を支持する結果とはならなかった。

仮説 3.　留学生との接触経験のある者は，ない者に比べ，ATAS の「曖昧さの享受」，「曖昧さの受容」といった AT のポジティブな側面の得点が高く，ATAS の「曖昧さへの不安」，「曖昧さの排除」，IIAS-R といった AT のネガティブな側面の点数は低い。

会話経験の有無による AT の差の検討(表 3-4)

留学生との会話経験の無い学生(3 群)は「曖昧さへの不安」，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」，「友人関係における曖昧さへの非寛容」が会話経験のある学生（2 群）よりも高かった。前述の過去の異文化での滞在経験の有無，サークルの所属の有無においては，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」のみで有意な差が見られたが，会話経験の有無においては，AT の他の下位尺度においても差が見られた。これは，過去の海外滞在経験やサークル所属の有無による群分けに比べ，会話の有無といった具体的な個人の行動による群分けを行った結果，個人のパーソナリティ特性がより反映された群分けになったためと考えられる。会話経験のない学生の方が曖昧さに対して，総じて intolerant であることがわかった。会話経験の無い学生は，留学生との会話場面を曖昧な状況ととらえ，それに対する不安や対処の難しさを感じ，会話場面を回避していることが示唆された。特に「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」で差が大きいのは，会話場面というのは当然，対人場面であること，加えて，会話経験の有無を尋ねた場合，会話経験が 0 回か 1 回以上か

ということを尋ねている。つまり，半見知りの関係，友人関係というよりは「初対面の関係」の状況に近い。また，第 2 章で述べたように初対面の関係における曖昧さというのは，半見知りの関係，友人関係における曖昧さに比べ“新奇性”の強い曖昧さと考えられ，曖昧さの質にも違いがある。よって，対人場面における曖昧さへの非寛容の中でも「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」で差が表れたと考えられる。統計的に有意ではないものが含まれるものの，値としては総じて，会話経験のない学生は会話経験のある学生に比べ，対人場面における曖昧さへの非寛容さの得点が高かった。

留学生の友人の有無及び友人関係形成意欲の有無による AT の差の検討(表 3-6)

留学生の友人がいない学生（3 群,4 群）は，友人関係形成意欲の有無に関わらず，2 群に比べ「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」が有意に高かった。このことから，初対面の関係における曖昧さに非寛容である学生は，友人関係形成の際に伴う相互作用を曖昧な場面と認知し回避していることが考えられる。また，たとえ友人関係形成の意欲があったとしても，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」が高いと，相互作用において心理的な不快を伴うことがあると考えられ，結果的に，相互作用が友人関係形成にまで至らないと考えられる。「曖昧さへの不安」に関しても，2 群が 4 つの群の中で最も低く，3 群との間に有意な差が見られたことから，対人場面に限らず，曖昧な状況に不安を感じる傾向が強い者は，友人関係形成のための相互作用を避ける，もしくは，相互作用があったとしても友人関係に至らないことが推測される。一方で友人関係形成意欲がある群とない群においては AT の有意な差は見られなかった。これは，留学生と交流したいという欲求同様，留学生の友人を作りたいという欲求は，曖昧さに対する tolerance と関連がないことを示している。

結果から，留学生との接触経験がある学生の「曖昧さへの不安」や「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」は接触経験の無い学生に比べ低く，仮説 3 の一部を支持する結果となったが，AT のポジティブな側面においては，群間差は見られなかった。仮説 3 は部分的に支持された。

3-5　まとめ

日本人大学生の AT と留学生との接触時の行動との関連を検討することが本章の目的であった。質問紙調査により海外での滞在経験の有無，留学経験の有無，日本人大学生の留学生交流サークル所属の有無，留学生との会話経験の有無，友人の有無及び友人形成意欲の有無による AT の差を検討した。留学経験の有無，留学生交流サークルの所属の有無にお

いては，それぞれ，留学生サークル無所属，留学経験の無い学生が，所属している学生，留学経験のある学生より「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」が有意に高い傾向にあった。実際の留学生との接触と AT の関連を検討するために行った留学生との会話経験の有無による AT の比較では，サークル無所属で会話経験がない学生（3 群）が，サークル無所属で会話経験がある学生（2 群）より「曖昧さへの不安」が有意に高く，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」もサークル無所属で会話経験の無い学生（3 群）が，会話経験のある学生(1，2 群）に比べ有意に高かった。友人の有無及び友人関係形成意欲の有無による AT の比較においては， 3 群の「曖昧さへの不安」，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」が 2 群より有意に高い結果となった。一連の分析において，有意な差が見られた AT の下位尺度は「曖昧さへの不安」，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」，「友人関係における曖昧さへの非寛容」であった。米田（2008）で IIAS-R を用いた調査においても日本人チューターの留学生との接触頻度に関連があったのはチューターの「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」であった。このことから，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」は，チューターではない日本人学生においても留学生との接触に影響を与える要因であることが示唆された。つまり，初対面の関係における曖昧さに非寛容な学生は，留学生との相互作用を避ける，もしくは友人関係形成に到る相互作用が行われないと考えられる。第 2 章で示されたように ATAS の下位尺度である「曖昧さへの不安」は「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」との間に中程度の有意な正の相関(r =.58)を示している。つまり，曖昧さの対象には違いがあるものの，いずれも曖昧さに対する不安，戸惑い，困難さを感じる傾向である。したがって，「曖昧さへの不安」が高い学生は，留学生との会話や相互作用に不安を感じ避けると考えられる。「曖昧さへの不安」や「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」が高い者は，留学生との接触場面をネガティブにとらえ，接触が抑制されたと考えることができる。一方で曖昧さをポジティブにとらえる傾向である「曖昧さの享受」や，「曖昧さの受容」はいずれの群間においても有意な差が見られなかった。つまり，曖昧さに tolerant であることが，異文化接触時の行動の促進要因とはなっていないことが示唆された。

本章の結果から，日本人大学生の AT が留学生との接触行動に与える影響として，曖昧さに対する intolerance が留学生との接触行動の抑制要因となることが示唆された。近年，日本から海外への留学者が減少していることから，日本の若者が「内向き志向」であるということが言われているが（文部科学省，2011），内向きのベクトルというより，外に向か

うベクトルが弱いとも言える。留学することで予想される異文化のルールの不可解さや，言語に起因するコミュニケーション不足から起こる情報の不足，これらは，場面を曖昧にする要因と言える。内向き志向の学生の内的要因として，曖昧さに対し intolerant である（AT が低い）ことが予想される。

第 3 章では異文化接触を曖昧な場面として取り上げた。確かに異文化接触には，自文化の成員との接触とは異なるルールが存在することから，相手についての情報が不十分であることが考えられる。また相手の言動が理解しがたい状況が起こりうることも想像できる。そういった意味で異文化接触場面は曖昧な場面の好例と言えるであろう。しかしながら，このような異文化接触場面が万人にとって，一様に曖昧な場面であるかについて明確な判断はできない。つまり，異文化接触場面が，ある人にとっては曖昧でも，ある人にとっては曖昧ではないことがあり得る。AT は曖昧さに対する反応の傾向であるので，その場面が曖昧であると知覚されなければ，個人の AT が行動に影響を与えることはないであろう。AT と曖昧な場面における個人の反応の関連を見るにあたり，ある場面における曖昧さを統制することは簡単ではない。誰にとっても同じように曖昧である場面が設定できれば，個人の AT の曖昧な場面における影響について，より正確に検討できる。

そこで第 4 章では確率情報を用いて曖昧な場面を設定する。Norton(1975)は，曖昧さのカテゴリーの一つに「確率」をあげている。確率情報であれば曖昧さを数的に記述することが可能である。確率情報によって曖昧さを表し，調査協力者に対し同様の曖昧さを提示することができる。

第 4 章　AT と曖昧性忌避との関連の検討

4-1　目的

第 4 章では，確率情報を含んだ曖昧な選択場面を設定し，個人の AT と曖昧な場面における選択との関連について検討する。一口に曖昧な場面と言っても，人によって曖昧さのとらえ方は異なる。曖昧さを数値化することは容易ではない。曖昧さは主観的なレベルでとらえられることがほとんどであろう。しかし，確率で表わすことのできる事象は客観的に示すことができる曖昧さの一つと考えられる。例えば，コインを投げて，表が出るかどうかということは，誰にとっても 50%の確率であり，はっきりしたことがわからない曖昧な場面と言える。つまり，確率を用いて曖昧さを示せば，曖昧さを統制して，個人の AT と曖昧な場面に対する反応との関連を検討することが可能になる。これは AT の特性をより見えやすくすると考えられる。

曖昧な状況というのは，多くの場合，判断や予測することが難しいことから，不安や恐れをもたらす。従って，私たちは曖昧さを嫌い，避けようとする。このように，曖昧さを嫌い避ける現象を経済学においては「曖昧性忌避(ambiguity aversion)」として扱っている。古典的な曖昧性忌避の例として Ellsberg（1961)の「エルスバーグの壺」という問題が，多くの研究に引用されている（Sherman,1974; Einhorn, & Hogarth 1986; 増田・坂上・広田 2002)。詳細については後述するが，本章ではこのエルスバーグの壺の問題を用いて，確率情報を含んだ曖昧な場面を設定し，個人の AT と曖昧性忌避との関連を検討することが目的である。

4-1-1　エルスバーグの壺

Ellsberg(1961)は期待効用理論の公理を侵犯する例として，後に「エルスバーグのパラドックス」や「エルスバーグの壺」として知られる問題を示した[2]。一般的に知られているエルスバーグの壺の問題は次のようなものである。

---

[2] 効用（選択肢を採択した結果に対する望ましさ）の期待値を考える理論を期待効用理論(expected utility theory)と呼ぶ。von Neumann & Morgenstern(1944)のものが有名で，彼らは，この理論を規範的な理論として位置づけている。規範的な理論の主要な目的は公理を示すことにあるエルスバーグの壺は，独立性の公理を侵犯する例とされている。独立性の公理とは，もし，2 つの選択肢が等価で各結果を得る確率が等しい場合，これらの結果の効用は 2 つの選択肢を選ぶ上で無視されるというものである（広田・ 増田・坂上,2006)。

共に 100 個の玉が入った壺がある。赤い玉を取り出すと 100 ドル獲得できるとする。以下の 2 つの壺があるとき，どちらの壺から取り出すのを好むか。

壺 1：赤い玉 50 個と白い玉 50 個からなる 100 個の玉が入っている。

壺 2：赤白の個数はわからず，合わせて 100 個の玉が入っている。

この問題ではどちらの壺においても，期待される成功確率は 50%となるので，通常，どちらを選ぶかの好みには，差がないと考えられる。しかし，実際，多くの人は壺 1 を選択する。これは壺 1 が成功確率が確実に 50%であることに比べ，壺 2 は成功確率が不確実（曖昧）であり，人々はこの曖昧さを嫌うため，曖昧性忌避の現象が起こるとしている。繁枡（1988）は 91 名の大学生に同様の問題を回答させた。その結果，8 割の学生が曖昧な壺の選択を避け，色玉の個数が明確な方の壺を選択した。

エルスバーグの壺ではシンプルに曖昧な場面が設定され，加えて，それに対する反応として，好む（選好）か好まない（忌避）かの 2 通りしかない。曖昧な場面における個人の反応を見る課題としてわかりやすい。

4-1-2　AT と曖昧性忌避との関連に関する先行研究

エルスバーグの壺を扱った曖昧性忌避に関する研究においては，確率の要因を操作することや，獲得できる金額の操作といった外的要因から曖昧性忌避の生起について論じられることが多い（増田・坂上他　2002）。従って，内的要因である個人のパーソナリティ特性としての AT と曖昧性忌避との関連について論じられた研究は少ない。

Sherman(1974)はエルスバーグの壺の問題を用いて AT との関連を検討している。Sherman はどちらか一方の壺を選ばせるのではなく，100 ドルの賞金に対して，それぞれの壺に，いくらまで参加費を出すかを尋ねている。その上で，壺 1（色玉の比率がわかっている）に出す参加費を壺 2（色玉の比率がわからない）に出す参加費で割ることで，個人の曖昧性忌避の程度が算出できるとしている。例えば，壺 1 に 30 ドル，壺 2 に 20 ドル出すと回答した場合，30 ドル/ 20 ドル=1.5 となる。もし，曖昧さを嫌がらず，両者の好悪に差がなければ，同じ参加費を出すため，値は 1 となる。さらに曖昧さを好むのであれば，壺 2 の方により多く参加費を出すために，この値が 1 以下になると考えた。この曖昧性忌避の程度と O'Connor(1952)の Walk's A scale を元に作成した AT 測定尺度の得点との相関を算出したところ，r=.43 の有意な正の相関を得た。つまり，曖昧さ不耐性が高い者ほど，曖昧性忌避の程度も高くなるということを示した。

Sherman（1974）の知見は，曖昧さ忌避と AT の関連を示すものであるが，第 2 章で述べたように，従来の AT 測定尺度は，AT を一次元的にとらえている。また尺度作成の過程においても不明瞭な部分が多く，妥当性に問題がある尺度が見られる(Furnham，1994)。そこで，本章では AT のポジティブな側面，ネガティブな側面を多面的に測定するために，西村（2007）の ATAS と友野・橋本（2005a）IIAS-R を用いて AT を測定し，曖昧性忌避との関連を検討する。

4-2　調査対象と方法

調査対象は近畿地方，中国地方の国公立大学，私立大学に在籍する人文・社会科学系学部に所属の日本人大学生 110 名（男性 20 名，女性 90 名）であった。平均年齢は 20.0 歳（SD=1.5）であった。調査期間は 2011 年 7 月～8 月である。質問紙は授業中に配布され，その場で実施回収，もしくは次週の授業の際に回収した。質問紙は 1.フェイスシート，2. 留学生との交流に関する質問，3. エルスバーグの壺問題(5 問)，4. ATAS, 5. IIAS-R の順で構成した。質問紙については論文末に資料として附す。尚，質問紙は「大学生の日常生活に関する調査」という名目で行った。2 の留学生との交流に関する質問は 3 章で使用した質問紙の簡易版を加えた。また，エルスバーグの壺問題は先行研究の Sherman(1974)で使用された問いに加え，期待される確率は Ellsberg(1961)の 100 個の玉を使用した問題と同様であるが，壺の中の玉の数を 2 個にしたもの，加えて，Ellsberg(1961)で示されている期待効用理論を侵犯する事例としてあげられている 3 種類の玉を使用した問題を加えた。以下の問題を使用した。それぞれ，【１】2 個問題，【2】100 個問題，【3】3 色問題：赤 or 黒，【4】3 色問題：黒黄 or 赤黄と名称をつけておく。それぞれの壺問題について以下のように尋ねた。

【1】2 個問題

2 個の玉が入っている壺から 1 個だけ玉を取り出します。赤玉を取り出せば 1 万円獲得できるゲームです。次の２つの壺があります。 壺 A：　赤玉 1 個と白玉 1 個からなる 2 個の玉が入っている。（明確） 壺 B：　赤玉，白玉の個数はわからず，合わせて 2 個の玉が入っている。（曖昧） ①参加費を払ってゲームをするとしたら，どちらの壺でゲームがしたいですか。②両方のゲームに参加するとしたら，それぞれ，いくらまで参加費を出せますか。

【2】100 個問題

100 個の玉が入っている壺から 1 個だけ玉を取り出します。赤玉を取り出せば 1 万円獲得できるゲームです。次の 2 つの壺があります。 壺 A：　赤玉 50 個と白玉 50 個からなる 100 個の玉が入っている。（明確） 壺 B：　赤玉，白玉の個数はわからず，合わせて 100 個の玉が入っている。（曖昧） ①参加費を払ってゲームをするとしたら，どちらの壺でゲームがしたいですか。 ②両方のゲームに参加するとしたら，それぞれ，いくらまで参加費を出せますか。

【3】3 色問題：赤 or 黒

壺の中に 90 個の玉が入っています。その中に赤玉が 30 個あります。さらに黒玉と黄玉が合わせて 60 個あります。この中から玉を一つだけ取り出します。当たりだと 1 万円獲得できます。①参加費を払ってゲームをするとしたら，どちらの条件でゲームがしたいですか。②両方のゲームに参加するとしたら，それぞれ，いくらまで参加費を出せますか。 条件 A：赤玉を取り出せば 1 万円もらえる。（明確） 条件 B：黒玉を取り出せば 1 万円もらえる。（曖昧）

【4】3 色問題：黒黄 or 赤黄

＊壺は条件【3】と同じ。①参加費を払ってゲームをするとしたら，どちらの条件でゲームがしたいですか。②両方のゲームに参加するとしたら，それぞれ，いくらまで参加費を出せますか。 条件 A：黒玉か黄玉を取り出せば 1 万円もらえる。（明確） 条件 B：赤玉か黄玉を取り出せば 1 万円もらえる。（曖昧）

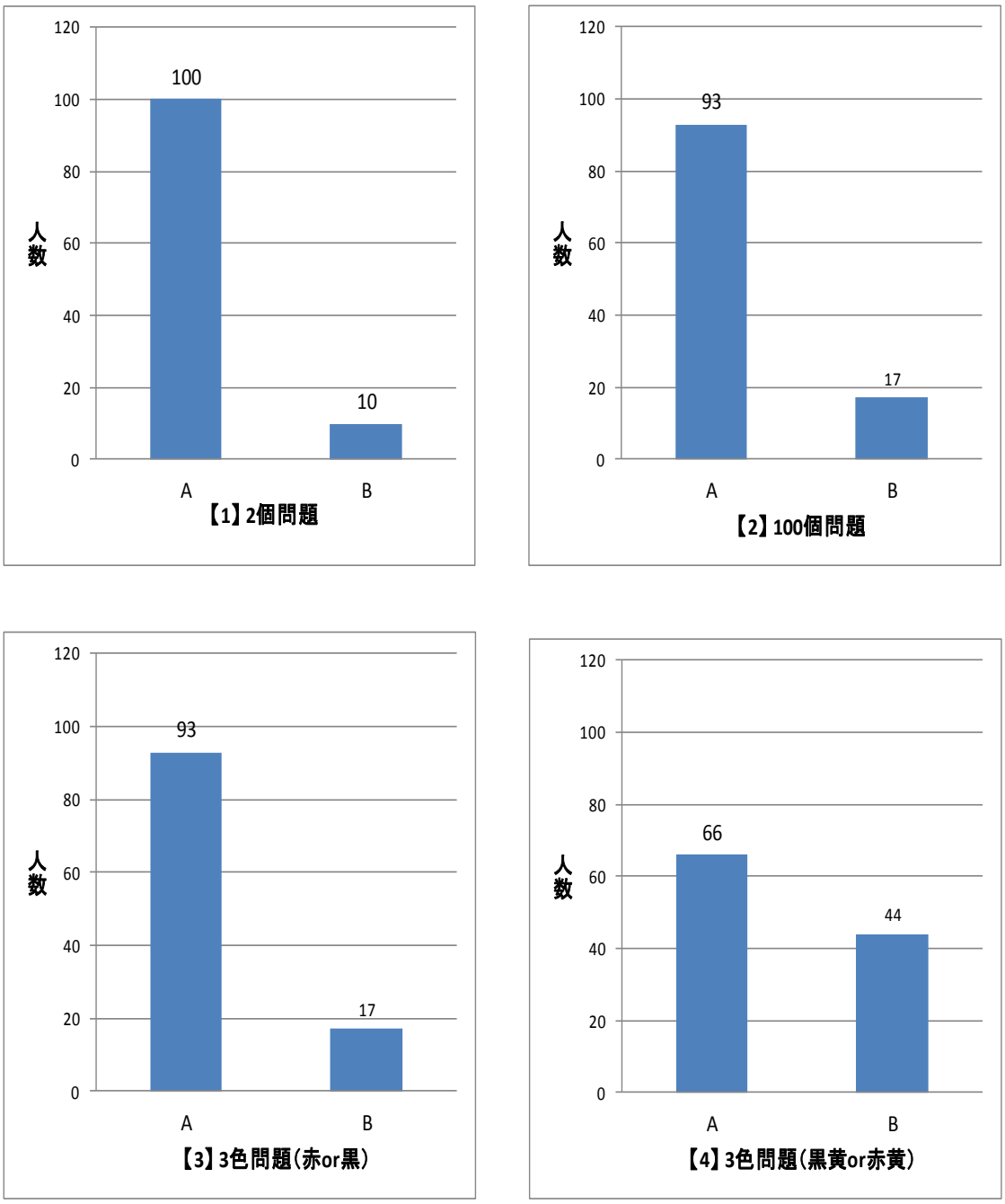
各問題において，壺 A，条件 A を選択した場合，色玉の内訳がわからない曖昧な選択肢 B を避けたことになり，曖昧性忌避が起こったものと考える。

4-3　結果

4-3-1　エルスバーグの壺問題に関する回答結果

各問題に対する回答（A or B）の集計を図 4-1 に示した。

図 4-1　エルスバーグの壺問題の回答集計



4 種類のエルスバーグの壺問題にすべてにおいて，曖昧性忌避を選んだ人数が有意に多かった。(【1】: $\chi^2=73.64$, $p<.001$; 【2】: $\chi^2=51.51$, $p<.001$; 【3】: $\chi^2=51.51$, $p<.001$; 【4】: $\chi^2=4.40$, $p<.005$)

次にそれぞれの壺に出す参加費の平均値を算出した。それぞれの問題における各壺の参加費の平均値の差の検定するために対応のある t 検定を実施した（表 4-1)。いずれの問題

においても，A（色玉の個数が明確な壺）の参加費が有意に高かった。

表 4-1　各選択肢に対する参加費の平均値の比較

	A（曖昧性忌避）		B		
	平均値	SD	平均値	SD	t値
【1】	1,207.26	1,904.10	623.63	1,236.449	5.125 ***
【2】	1,173.17	1,817.03	677.26	1,336.621	4.819 ***
【3】	900.75	1,607.21	638.48	1,189.370	3.534 **
【4】	1,043.48	1,805.27	806.66	1,333.534	2.416 *

注1. *p<.05, **p<.01, ***p<.001

4-3-2　AT と曖昧性忌避の有無との相関分析

AT 測定尺度の下位尺度得点と曖昧性忌避の有無との間の相関係数を算出した（表 4-2）。尚，第 2 章おける，ATAS，IIAS-R の因子分析の結果を踏まえ，下位尺度得点を算出する方法も考えられたが，先行研究において原版を用いた研究が多いことから，ここでは，原版の下位尺度に従い得点を算出した。

エルスバーグの壺問題間の曖昧性忌避の有無の相関係数を表 4-3 に示した。曖昧性忌避の有無については，曖昧性忌避が起こった場合を「1」，そうでない場合を「0」とするダミー変数を用いて得点化した。

ATAS と曖昧性忌避の有無との間の相関

「曖昧さの不安」と【2】の曖昧性忌避の有無との間に有意な正の相関（r=.20, p<.05）が見られた。

IIAS-R と曖昧性忌避の有無との間の相関

「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」と【2】の曖昧性忌避の有無との間に有意な正の相関（r=.30, p<.01），「友人関係における曖昧さへの非寛容」と【2】の曖昧性忌避の有無との間に有意な正の相関（r=.20, p<.05）が見られた。

エルスバーグの壺問題間の曖昧性忌避の有無の相関

【1】と【2】，【3】との間に有意な正の相関（いずれも r=.30, p<.01），【2】と【3】との間に有意な正の相関（r=.23, p<.05），【3】と【4】との間に有意な負の相関（r=－.20, p<.05）が見られた。

表 4-2　AT 下位尺度と曖昧性忌避の有無との相関係数

	【1】		【2】		【3】		【4】	
曖昧さの享受	−.15	(110)	−.16	(110)	−.17	(110)	.05	(110)
曖昧さへの不安	.02	(110)	.20*	(110)	−.07	(110)	−.05	(110)
曖昧さの受容	.06	(109)	−.05	(109)	−.01	(109)	.12	(109)
曖昧さの統制	−.04	(110)	−.05	(110)	−.04	(110)	.02	(110)
曖昧さの排除	.00	(110)	−.06	(110)	.00	(110)	−.12	(110)
初対面の関係における曖昧さへの非寛容	.16	(110)	.30**	(110)	.02	(110)	−.04	(110)
半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	−.03	(110)	.16	(110)	−.09	(110)	−.06	(110)
友人関係における曖昧さへの非寛容	−.08	(109)	.20*	(109)	−.08	(109)	−.01	(109)

注.1（　）は有効標本数を示す。　注2.*p<.05, **p<.01

表 4-3　エルスバーグの壺問題間の曖昧性忌避の有無の相関係数

	【1】	【2】	【3】	【4】
【1】	-	.30**	.30**	−.06
【2】	(110)	-	.23*	−.04
【3】	(110)	(110)	-	−.20*
【4】	(110)	(110)	(110)	-

注.1（　）は有効標本数を示す。　注2.*p<.05, **p<.01

4-3-3　AT と曖昧性忌避の程度との相関分析

Sherman(1974)に倣い，A（明確）に出す参加費を B（曖昧）に出す参加費で割ることで，個人の曖昧性忌避の程度得点とし，AT 測定尺度の下位尺度得点との間の順位相関係数を算出した（表 4-4）。加えて，問題間の曖昧さ忌避の程度の順位相関係数を表 4-5 に示した。尚，参加費を 0 円にしている場合は，便宜上 1 円として計算を行った。

ATAS と曖昧性忌避の程度との間の相関

「曖昧さの受容」と【2】,【4】の曖昧さ忌避の程度との間に有意な正の相関（r_s=.26~29, p<.01）が見られた。

曖昧さ忌避の程度間の相関

【1】と【2】,【3】との間に有意な正の相関（r_s =.30~.59, p<.01）,【2】と【3】との間に有意な正の相関（r_s =.47, p<.01）が見られた。

表 4-4　AT 下位尺度と曖昧性忌避の程度との相関係数

	【1】		【2】		【3】		【4】	
曖昧さの享受	−.15	(110)	−.01	(110)	−.03	(110)	.01	(110)
曖昧さへの不安	−.06	(110)	.10	(110)	.07	(110)	−.12	(110)
曖昧さの受容	.08	(109)	.26**	(109)	.16	(109)	.29**	(109)
曖昧さの統制	−.04	(110)	−.03	(110)	.15	(110)	−.10	(110)
曖昧さの排除	.05	(110)	.08	(110)	−.03	(110)	−.14	(110)
初対面の関係における曖昧さへの非寛容	−.05	(110)	.03	(110)	.00	(110)	−.08	(110)
半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	.01	(110)	.02	(110)	−.01	(110)	.00	(110)
友人関係における曖昧さへの非寛容	.13	(109)	.12	(109)	.00	(109)	−.10	(109)

注.1（　）は有効標本数を示す。　注2. **p<.01

表 4-5　エルスバーグの壺問題間の曖昧さ忌避の程度の相関係数

	【1】	【2】	【3】	【4】
【1】	-	.59**	.30**	.09
【2】	(110)	-	.47**	.14
【3】	(110)	(110)	-	.10
【4】	(110)	(110)	(110)	-

注.1（　）は有効標本数を示す。　注2. **p<.01

4-4　考察

本章では客観的に曖昧さを示すことができる確率情報を含んだ曖昧な選択場面を設定し，個人の AT と曖昧な場面における選択との関連について検討した。課題としてエルスバーグの壺問題を使用し，曖昧さを嫌い避けようとする曖昧性忌避の現象と AT との関連を検討することが本章の目的であった。

4-4-1　エルスバーグの壺問題について

本研究においても，先行研究で示されているような曖昧性忌避が見られた。特に【1】においては，その傾向が強かった。その一方で，【4】は，曖昧性忌避の割合が他の問題に比べ低かった。これは，【3】の影響を受けていると考えられる。仮にある調査協力者が【3】で赤を選んだ場合，彼は黒の個数を 29 以下だと考えていることになる。このことは同時に黄が 31 以上であることを意味する。それを踏まえ，【4】を考えると，赤黄は理論上，61 以上となり，黒黄に比べ成功確率が高くなる。【4】だけを見ると，赤黄の方が曖昧な選択肢であり避けられるべきものであるが，【3】を踏まえると数学的に赤黄の方が成功確率が高いと気づき，選んだ可能性がある。表 4-2 を見てみると【3】と【4】間には負の相関が見られる（$r=-.20$, $p<.05$）。つまり，【3】で A（曖昧性忌避）を選んだ場合，次の問題では B（曖昧）を選ぶことが多いことを示している。相関係数が有意なことからも，【3】と【4】の回答には関連があり，影響を受けていると考えることは妥当である。

参加費の平均を見てみると，すべての問題において，A の方が有意に高い。このことから，調査協力者は，期待される成功確率が，A，B で同じであっても，A と B に何かしらの差を見出していることになる。A（曖昧さの程度が低い方）に価値を感じていると言える。言い換えれば，確実な方が好ましいと感じている。

4-4-2　AT と曖昧性忌避の有無との相関分析

エルスバーグの壺問題間の曖昧性忌避の有無の相関

【1】,【2】,【3】の間にはいずれも有意な正の相関があることから，これらの 3 つの問題においては曖昧性忌避が一貫して起きていることがわかる。一方で，前述したように，【4】は，【3】と有意な負の相関を示し，他の問題とは有意な相関を示していないことから，曖昧性忌避は見られるものの【3】の影響により，B を選ぶ人数が多くなったと考えられる。

ATAS と曖昧性忌避の有無との間の相関

「曖昧さへの不安」と【2】の曖昧性忌避の有無との間に有意な正の相関が見られた。これは，Sherman(1974)の知見を追認する結果と言える。曖昧さに対する不安から，曖昧さを回避しようとする，そのことが，曖昧性忌避を引き起こすことが示唆された。しかしながら，他の壺問題の忌避の有無との有意な相関は見られなかった。この点に関して，各問題の特徴から考えてみたい。4 種類の問題の特徴を表 4-6 に示した。まず，【1】に関しては，【2】同様，期待される当たりの確率は 50%で同程度の曖昧さと言える。しかし，曖昧な選択肢の取りうる値を比べてみると，大きく異なる。曖昧な選択肢の取りうる値とは，B にお

ける赤玉の個数の取りうる値のことを指す。【1】では，B において赤玉の個数の取りうる値は，「0」，「1」，「2」の 3 通りとなる。一方，【2】は，「0」から「100」までの 101 通りとなる。【2】は曖昧な選択肢の取り得る幅が大きい。どの値をとるかという点で【2】は【1】より選択肢が多く，より曖昧性が高いと言える。従って，【2】において，曖昧性忌避の有無と「曖昧さへの不安」との間に関連が見られたと考えられる。【3】，【4】の曖昧性忌避の有無と有意な相関を示さなかった理由としては，まず，【4】に関しては前述の通り，【3】の回答の影響を受けるため，AT との関連は示されなかったと考えられる。【2】では有意な相関を示し，【3】との間で AT が有意な相関を示さなかった理由としては曖昧さの程度の違いが考えられる。表 4-6 に示したように，【2】においては，B（曖昧である方の選択肢）の赤玉の個数は「0～100」の間のいずれかとなる。それに対し，【3】の場合，B において黒玉の個数は「0～60」の間のどれかになる。つまり，【2】の方が曖昧さの程度が高いと言える。【2】は【1】，【3】，【4】に比べ，より曖昧な問題であり，「曖昧さの不安」と有意な相関を示したと考えられる。

表 4-6　各問題の特徴

	【1】 2個問題	【2】 100個 問題	【3】 3色問題 （赤or黒）	【4】 3色問題 （黒黄or赤黄）
期待される当たりの確率	50%	50%	33%	67%
曖昧な選択肢の値のレンジ	0～2	0～100	0～60	0～60
考慮される色玉の種類	2種類	2種類	2種類	3種類

IIAS-R と曖昧性忌避の有無との間の相関

IIAS-R においては「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」と「友人関係における曖昧さへの非寛容」が【2】の曖昧性忌避の有無との間に有意な正の相関を示した。「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」は ATAS の「曖昧さへの不安」との相関も高く，IIAS-R が測定する AT の主要な要因が不安であることを考えると，曖昧さに対する不安が曖昧性忌避を引き起こすという構造が見えてくる。【2】は確率的に最も曖昧であることに加え，前述した曖昧さのレンジによる曖昧さが加わり，より曖昧性が高く，ATAS，IIAS-R の測定する AT のネガティブな側面と有意な相関を示したと考えられる。

4-4-3　AT と曖昧性忌避の程度との相関分析

ATAS と曖昧性忌避の程度との間の相関

「曖昧さの受容」と【2】,【4】の曖昧性忌避の程度との間に有意な正の相関が見られた。「曖昧さの受容」は AT のポジティブな側面である。そうすると，この結果は一見，矛盾するように思われる。曖昧さを受け入れる人であれば，曖昧さを忌避しないだろうと想像できるからである。確かに,「曖昧さの受容」とは曖昧さを受け入れることであるが，別の見方をすれば，曖昧な状況に好悪の評価をせず，いつもどおりにふるまえるということではないだろうか。そういう者は曖昧な状況に置かれても，評価や判断のパフォーマンスが，いつもと変わらないであろう。つまり，曖昧さを含んだ選択肢を前にして，選択肢間の曖昧さを見極めて参加費を決めた結果，参加費の差が大きくなったと言える。【2】と【4】においてのみ，相関が見られた理由としては,【2】は前述したように，有意な相関が見られなかった他の 2 つ問題に比べて，確率的に最も曖昧であり，加えて，曖昧な選択肢の取り得る値のレンジが広く，最も曖昧さの程度が高い問題であることが考えられる。【4】は考慮すべき色玉の数が多く，他の問題に比べ難解であった。言い換えれば，A と B のどちらを選択するべきか，はっきりしないという点で曖昧な問題であった。この問題の各選択肢を選んだ人数が他の問題に比べ，割れていることが，それを示している。つまり,【2】と【4】いずれも，他の 2 つ問題に比べ，曖昧さの程度が高い問題であったため,「曖昧さの受容」が高い者ほど，選択肢間に参加費の差が出たと考えられる。しかしながら，これは曖昧さを強く忌避していることではない。ATAS の「曖昧さの不安」や IIAS-R の「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」,「友人関係における曖昧さへの非寛容」の得点と曖昧性忌避の有無との間には有意な正の相関が見られた。そうであるならば，忌避の程度においても AT のネガティブな側面と相関が見られそうであるが, 有意な相関は得られなかった。このことは，A に出す参加費を B に出す参加費で割ることで，個人の曖昧性忌避の程度と見なすことに疑問を示すものである。曖昧性忌避は，曖昧さを嫌い避けることである。曖昧性忌避の程度の高い者は，そもそも，損するか得するかが，はっきりしないこのようなギャンブル場面を好まないことが予測される。しかし，Sherman(1974)では，曖昧性忌避の程度を算出するために強制的に 2 つの選択肢の参加費を回答しなければならない。つまり，この時点で曖昧さを避けることはできない。その上で，参加費を回答している。ここでの参加費が示す意味は，ギャンブルに対する価値である。もともと，このようなギャンブルを好まない者は，どちらの選択肢も精査しないで参加費を決めるであろう。2 つの選択

肢の参加費の比率は，曖昧性忌避の程度というよりは，2 つの選択肢がどれほど異なると考えているかを表している。つまり，A と B の曖昧さを弁別できているかどうかということである。「曖昧さの受容」が高い者は，曖昧な状況におかれても，曖昧さを精査し，区別できると考えられる。

4-5　まとめ

本章の目的は，確率情報を含んだ曖昧な場面を設定し，個人の AT と曖昧さを嫌い，避けようとする現象である「曖昧性忌避」との関連を検討することであった。そのためにエルスバーグの壺と呼ばれる，曖昧性忌避が起こるとされる選択課題と ATAS，IIAS-R を日本人大学生に同時に実施した。4 種類のエルスバーグの壺問題において，曖昧性忌避が見られた。相関分析から，100 個問題において，曖昧性忌避の有無と「曖昧さへの不安」，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」，「友人関係における曖昧さへの非寛容」との間に有意な正の相関が示された。これらは AT のネガティブな側面であり，曖昧さを脅威とみなし，曖昧な選択肢を避けた結果と考えられる。すべての問題で曖昧性忌避が見られたが，AT のネガティブな側面と関連があったのは，100 個問題のみであった。これは，100 個問題は他の問題に比べ，選択肢の曖昧さの程度が，大きかったためであると考えられる。一見，同じ曖昧性忌避が見られたとしても，その現象のメカニズムは曖昧さの程度により，異なることが示唆された。2 個問題の場合は，曖昧な選択肢を忌避したのではなく，むしろ，確実な選択肢をより好み，明確な選択肢を選んだと考えることができる。一方で，曖昧性忌避の有無と AT のネガティブな側面が関連を示した 100 個問題に関しては，曖昧性を避け，明確な選択肢を選んだと言える。このことから，AT がどのような曖昧な場面でも，行動に影響を与えるわけではなく，個人差はあるであろうが，ある一定の曖昧さを越えた時に，AT が個人の行動に影響を与えると考えられる。Lazarus & Folkman(1984)は，曖昧さが大きければ大きいほど，環境の意味を決定する上で個人的要因の影響が大きくなるとしている。曖昧さの程度が大きい問題でのみ，AT との関連を示したことは，Lazarus & Folkman(1984)の主張を支持する結果と言える。

曖昧性忌避の程度と AT の相関分析から「曖昧さの受容」との間には有意な正の相関が見られた。有意な相関が見られたのは，100 個問題と 3 色問題（黒黄 or 赤黄）であった。Sherman(1974)では，色玉の比率が明確な壺に出す参加費を色玉の比率が曖昧（不明確）な壺に出す参加費で割ることで，個人の曖昧性忌避の程度得点としているが，本研究では AT のネガティブな側面との有意な相関は見られなかった。Sherman が曖昧性忌避の程度

としている値は，忌避の程度ではなく，2 つの選択肢の曖昧さの程度をどれほど弁別しているかを示す値だと考えられる。「曖昧さの受容」が高い者は，曖昧な状況において，曖昧さの程度を精査することができる。その結果，2 つの選択肢間の参加費に差をつけたと考えられる。

誰にとっても同様である確率情報を用いた曖昧な場面における，個人の AT と曖昧性忌避との関連を検討した結果，曖昧さの程度が高い場合において，「曖昧さへの不安」，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」，「友人関係における曖昧さへの非寛容」，「曖昧さの受容」と曖昧性忌避との間に関連が示された。曖昧さへの対処として，「曖昧さへの不安」が回避とするならば，「曖昧さの享受」，「曖昧さの統制」，「曖昧さの排除」は接近と考えることができる。この観点から考えると「曖昧さの受容」というのは，接近と回避の中間であり，状況判断を行う待機と言うことができる。これは従来の AT の曖昧さに耐える・耐えられないの一次元的な見方とは異なり，曖昧さへの対処として，複数の側面を持つ AT の特徴を示している。

第 5 章　総合考察

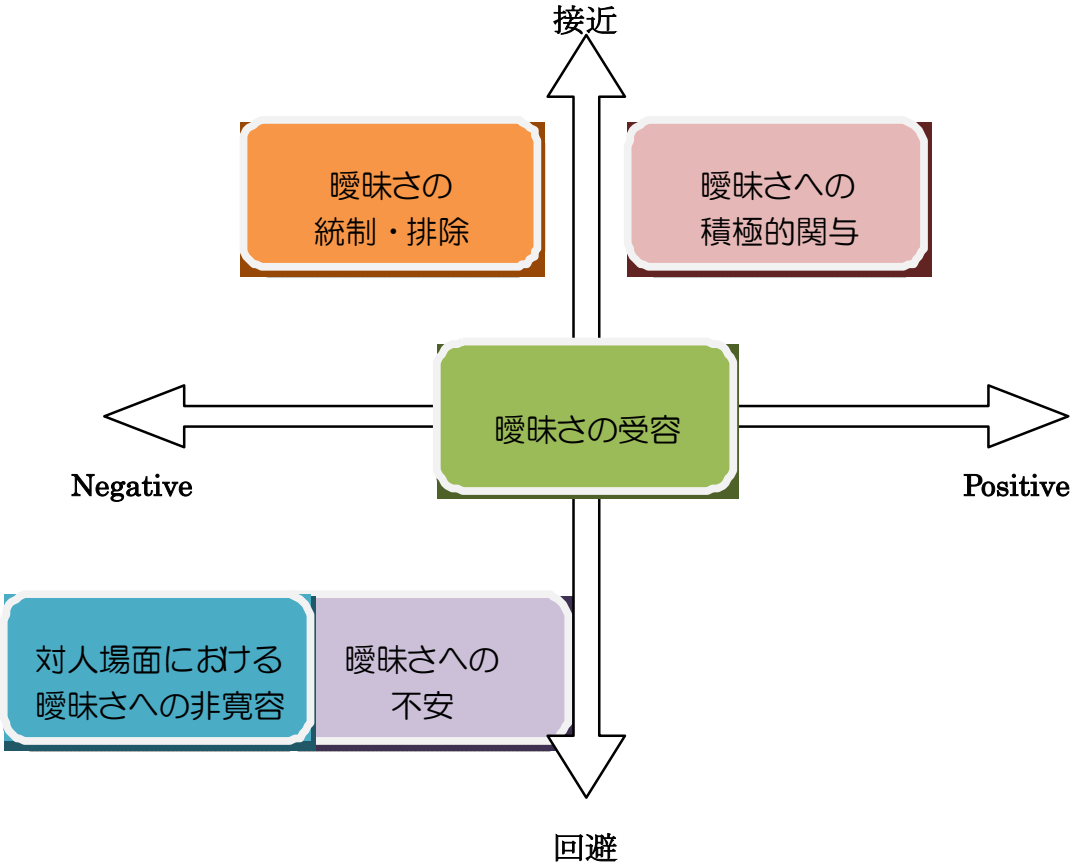
本論文では曖昧さに対する反応の個人差をとらえる概念である AT（Tolerance of Ambiguity)の心理学的研究を行った。目的としては，AT の概念を再考すること，また AT の曖昧な場面における行動との関連を異文化接触場面を中心に検討し，明らかにすることであった。以下に本研究のまとめと，今後の課題を示す。

5-1　AT 概念について

第 1 章で述べたように，AT 研究の問題点として，AT を測定する尺度の信頼性・妥当性が乏しいこと，また，従来の研究が AT を曖昧さに耐えられる・耐えられないの一次元的にとらえていることがあった。尺度や次元性の問題を乗り越え, AT 研究を行うには, まずは, AT の多次元構造を明らかにし，AT を測定する際に，どの尺度を使用するべきかを明らかにする必要があった。そこで第 2 章では，友野・橋本（2005a）の IIAS-R と西村（2007）の ATAS の 2 種類の尺度を実施し，相関・因子分析を行った。その結果，AT は一次元的な構造ではなく，ポジティブな側面，ネガティブな側面を含んだ多次元構造が示された。また, 対人場面における AT と一般的な (場面限定をしない) AT は異なることが示唆された。AT を多面的に測定するためには現時点では IIAS-R と ATAS の 2 種類の尺度を併用することが望ましいと考えられる。第 3 章では，従来の AT 研究には，あまり見られなかった個人の AT と行動レベルの変数との関連を検討した。曖昧な場面の好例として，留学生との異文化接触場面を設定し, 日本人大学生の AT と異文化接触行動との関連を検討した。その結果, 曖昧さに耐性のない者は，留学生との接触に積極的ではないことが示された。AT のネガティブな側面である「曖昧さの不安」や「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」が異文化接触行動の抑制要因となることが示唆された。一方で, AT のポジティブな側面である「曖昧さの享受」,「曖昧さの受容」と異文化接触行動との関連は示されなかったことから，AT は異文化接触行動の促進要因ではないことが示された。異文化接触場面は，確かに曖昧な場面であると容易に想像できるが，誰にとって，どの程度，曖昧であるかは，判断できない。そこで，第 4 章では，確率情報を用いた曖昧さを提示した選択課題を実施し，AT と選択行動との関連を検討した。その結果，曖昧さの程度が高い課題において，曖昧性忌避の有無と「曖昧さへの不安」,「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」,「友人関係における曖昧さへの非寛容」との間に有意な正の相関関係が見られた。つまり，曖昧さに不安を感じ，対人場面における曖昧さに非寛容である者ほど，曖昧性忌避の傾向を示した。また,

「曖昧さの受容」が高い者ほど，2 つの選択肢の曖昧さの弁別の程度が大きかった。本論文の結果をもとに AT の多次元構造を図 5-1 に示した。

図 5-1　AT の多次元構造



横軸に曖昧さをポジティブにとらえるか，ネガティブにとらえるかを示し，縦軸に対処として接近するか，回避するかを示し，第 2 章で行った IIAS-R と ATAS の全項目による因子分析の結果の各因子を配置した。「曖昧さへの積極的関与」は，ATAS の原版の「曖昧さの享受」の項目で多く構成されていることから，曖昧さを好ましくとらえ，その反応として，曖昧さに接近するものと考えられる。「曖昧さの統制・排除」は ATAS の「曖昧さの統制」，「曖昧さの排除」が一つの因子にまとまったものである。これは，質問項目から検討すると，曖昧さを好ましいものとは，とらえていない。しかしながら，その対処として，曖昧さを低減するために，情報を集めたいといった項目から構成されており，曖昧さに接近するものと考えられる。「曖昧さへの積極的関与」と「曖昧さの統制・排除」は，価値評価と

しては対照的的な因子ではあるが，その対処としては，曖昧さに働きかけるという点で共通している。「曖昧さへの不安」，「対人場面における曖昧さへの非寛容」は前者が，項目の大半が ATAS の原版の「曖昧さへの不安」の項目で構成されている，後者は項目の大半が IIAS-R の項目で構成されている。この 2 つの因子は，曖昧さをネガティブなものとしてとらえている点で一致している。これらの因子に共通するのは，曖昧さに対する不安である。その対処として，曖昧さに近寄らない回避行動をとる。留学生との接触行動を避けることや，曖昧性忌避も回避行動の表れと言える。「曖昧さの受容」は，曖昧さへの評価としては，ポジティブにもネガティブにもよらない中立的な評価と見ることができる。対処として，接近も回避もせずに，曖昧さを受け入れ，状況を見極めていると考えられる。

従来，AT は低いと，曖昧さを脅威としてとらえ，高いと曖昧さを好ましいものとしてとらえるという一次元的なものとされてきた。しかしながら，本研究の結果は，AT は曖昧さへのポジティブ，ネガティブ，ニュートラルな評価，及びその対処として，接近，回避，待機の側面を持つ多次元的に構成されるものであった。今後の AT 研究においては，AT のどの側面かを明らかにした上で，他の心理学的変数との関連を検討していく必要があるであろう。

5-2　AT と曖昧な場面における行動について

先行研究では，AT と他の認知，感情レベルの心理学的変数との関連を示した研究が多く，行動レベルの変数との関連は，あまり検討されてこなかった。本論文では，第 3 章，第 4 章において，異文化接触行動，曖昧性を避ける行動である曖昧性忌避と AT との関連を検討した。

先行研究において，異文化接触の際に必要とされる資質として，AT があげられている。Ruben(1976)は，効果的な異文化接触に必要な資質の一つとして，曖昧さへの寛容さ（Tolerance for Ambiguity）をあげている。また，山岸他（1992）は「異文化対処能力」の枠組みとして「カルチュラル・アウェアネス」「自己調整能力」「状況調整能力」「感受性」を提案している。「自己調整能力」の内容には「寛容性」があり，①トレランス，②心理的ストレスに対処する力，③曖昧性に耐えることの 3 つがあげられている。先行研究では，効果的な異文化接触に必要な資質として概念的に AT が提出されてはいたが，実証的に検証された研究はこれまで見られなかった。本研究の結果から，留学生との会話経験が無い学生，留学生の友人がいない学生の「曖昧さへの不安」，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」は，会話経験があり，留学生の友人がいる学生より有意に高い傾向であることが

示された。米田(2008）の留学生の研究・生活の支援を行う日本人チューターの資質の検討においても，「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」の高いチューターは，担当する留学生との接触頻度が低いことが示されている。つまり，AT のネガティブな側面が，異文化接触行動の抑制要因となることが示唆された。資質という言葉の意味から考えると，抑制要因を資質と呼ぶのは，おかしいかもしれない。しかしながら，異文化接触が十分に行われない原因の内的要因として，個人の AT のネガティブな側面が関係することは，効果的な異文化接触を考える上で，考慮するべき点となるであろう。

一方で，AT の曖昧さに対する接近や待機（曖昧さの受容）の側面と異文化接触行動との間に有意な関連が見られなかった。この理由としては，留学生との異文化接触行動の動機が，曖昧さに起因していないことが考えられる。曖昧な場面に共通しているのは，選択の困難さである。日本人学生は，留学生との接触において，選択の困難が理由で，より異文化接触行動をとるわけではないということである。例えば，AT の一側面である，「曖昧さの享受」は，曖昧さを好ましいものととらえ，曖昧さに接近する傾向だが，留学生とより接触しようとする学生は，留学生との相互作用において，選択の困難さへの対処として相手に接近するのではなく，ただ，相手に対する興味や関心から相手に接近していると考えられる。また，「曖昧さの排除」，「曖昧さの統制」は曖昧さをネガティブにとらえ，曖昧さを減少させるために曖昧さに接近する傾向であるが，曖昧さを減少させるには，情報を集める必要がある。しかしながら，留学生との接触では，言語の問題があることが考えられ，十分に意思疎通ができないことが予測される。その場合，曖昧さへの対処として接近は難しく，回避行動がとられたと考えられる。よって，「曖昧さの統制」や「曖昧さの排除」と異文化接触行動との間に有意な関連が見られなかったと推測される。「曖昧さの受容」に関しては，性質上，行動として表れにくいと考えられる。「曖昧さの受容」は曖昧さの程度を見極めるために，好悪の評価をせず，つかず離れずいることである。八代・樋口・コミサロフ・荒木 ・山本 （2001）では，異文化コミュニケーション・スキルの一つとして，エポケー（判断留保）をあげている[3]。これは，自分の判断や価値をいったん，脇に置いておく姿勢のことを指している。八代らは，エポケーが不確実で予測が難しい状況において，相手を知りながらコミュニケーションをすることに役立つとしている。曖昧さに対し，好

[3] エポケーは哲学用語でギリシア語で「とどめる，差し控える」という意味を持つ。哲学者のフッサール（1859－1938）は現象学の領域の研究のために日常的，自然的な見方による判断を差し控える（カッコにいれる）という意味で，この語を使用している。

悪の評価をせず，曖昧さを見極める「曖昧さの受容」はエポケーと同様と言えるであろう。本研究では，「曖昧さの受容」と異文化接触行動の直接の関連は見られなかったが，「曖昧さの受容」も効果的な異文化接触を行う上で重要な資質と考えられる。

AT の現実場面での応用としては，例えば，異文化接触を伴う職業の適性検査の指標として AT の利用が考えられる。海外に派遣される職業において，現地での異文化接触は，避けては通れない。曖昧さが伴う異文化接触を回避せずに行えるか，また，曖昧な状況の中で，十分に状況を分析できるかは，AT を測定することで，予測することが可能になるであろう。仮に AT のネガティブな側面が高い個人が派遣される場合にも，曖昧さの観点から見れば，曖昧さの程度が少ないと考えられる文化的距離の近い派遣先を選ぶといったことも，対処として考えることができるであろう。

また，White and Shullman(2010)は，リーダーシップ研究の中で，環境の変化が速い現代における良いリーダーは，曖昧な状況を受け入れ，意思決定を行っていく者としている。これは，言い換えれば，曖昧さを受容することである。組織における，良いリーダーの資質の指標としても，AT が有用であると考えられる。

5-3　今後の課題

今後の課題は，大きく分けて２つあると考える。一つは AT のポジティブな側面に関する研究の蓄積である。先行研究では，AT のネガティブな側面と不適応行動との関連が示されてきた。本研究の一連の調査でも，AT のネガティブな側面と他の変数との間に有意な関連が多く見られた。その一方で，AT のポジティブな側面である「曖昧さの享受」と有意な関連のある変数が見られなかった。有意な関連が見られなかった理由として，尺度の網羅性が考えられる。ATAS と IIAS-R の特徴を考えた場合，抽象的な場面における曖昧さに対する AT の測定はポジティブな側面，ネガティブな側面ともに，ATAS がカバーしていると考えられるが，IIAS-R が測定するのは，対人場面における AT のネガティブな側面のみである。つまり，現時点では対人場面における「曖昧さの享受」や「曖昧さの受容」といった耐性にあたる部分の測定は十分にできていないと考えられる。例えば，初対面の人が集まるパーティーに緊張せず喜んで行くとか，知らない人が隣に座ると話しかけてみたくなるといったような対人場面における曖昧さを好ましく思う，または受け入れられるような反応について測定できる尺度の開発が必要である。従来の研究では「曖昧さへの耐性が低い人は○○しない（できない）」といった知見が示されることが多かった。しかし，AT の現実場面での応用を考えた場合，適応的反応・行動との関連を示すことも必要である。「耐性

が高い人は○○できる」といった方が，評価基準や適性テスト等に導入しやすいであろう。

もう一つの課題は，曖昧さ不耐性の改善方法の提案である。AT のポジティブな側面の向上のためのトレーニングの開発等は興味深いことではあるが，本研究の結果から示されることは，曖昧さに対する耐性がないこと，不耐性であることのデメリットである。AT は多次元構造を持っており，ポジティブな側面をトレーニングで向上させたとしても，それは不耐性を軽減することと同義ではない。現状において，AT のポジティブな側面の測定が網羅的でないとすれば，不耐性を軽減するための方法の提案の方が現実的であると考える。歴史的には AT はパーソナリティ特性として考えられてきた。パーソナリティ特性であるとすれば，変えることは難しいが，本研究が示すように，曖昧さに対する反応は常に一貫しているわけではなく，曖昧な場面によって同じ個人でも異なる。Glover et al. (1978)は，シミュレーションゲームによる異文化トレーニングをすることで，曖昧さへの不耐性が低減したことを報告している。これは，トレーニングによる AT の変化の可能性を示している。AT そのものを変化させることが難しいとしても，ある状況が個人にとって過度に曖昧でなければ，AT のネガティブな側面が行動に影響を与えることはない。つまり，ある状況の曖昧さを低減することができれば，不適応行動は起こりにくい。曖昧さを低減することは，言い換えれば，選択の困難さを低減することである。低減するアプローチとしては，一つは選択に必要な情報を集めることであろう。異文化接触であれば，相手に対する情報を事前に得ておくことで，相手の言動が予測しやすくなるであろう。また，選択肢が多いために選択が困難であるならば，選択肢を減らすことも一つの方法であろう。似たような選択肢は 1 つと考え，できるだけ選択肢を減らすことで選択の困難さが減少することもあるであろう。常にこのような対処が行えるとは限らないが，曖昧さに対し，回避以外の方略があることを知っておくことは，意味があると考える。AT のネガティブな側面を低減する方法，もしくは，行動レベルでの曖昧への対処方法に関する研究の蓄積，改善するためのトレーニングの開発が望まれる。

5-4　おわりに

日常は曖昧さにあふれている。多くの場合，人間にとって曖昧さは好ましいものではない。曖昧な状況では，出来事の意味がはっきりせず，十分な推測ができない。十分な推測ができなければ，状況を見誤り，不利益を被ることもある。曖昧さに，どのように対処するかは，極めて重要な問題であると言える。ゆえに，半世紀以上に渡って，心理学では曖昧さに対する反応の個人差である AT が研究の対象として有り続けてきた。AT 研究は心理

学，また他の学問領域においても行われてきた。これは，曖昧さが，何かを評価したり，判断したりといった，誰もが行う基本的な選択場面を「曖昧さ」という概念でとらえることで，広範囲の事象を含んでいるからだと言える。これはAT研究の持つ長所であり，同時に短所でもある。広範囲に事象をとらえられることで，研究領域は拡大され，ATとの関連を示した知見が多く示された。一方で，使用されるAT測定尺度により，測定されるATが異なること，また，AT概念の一次元的なとらえ方は，研究結果の拡散を招き，先行研究の知見の統合を難しくしてきた。

本研究では，AT 概念の再考を行い，AT の多次元構造を明らかにした。多次元構造を持つATが，曖昧な状況における個人の行動に与える影響について検討し，異文化接触場面においては，ATのネガティブな側面が，異文化接触行動の抑制要因となることが示唆された。加えて，客観的に曖昧な場面と言える確率情報を用いた選択課題における，ATと選択行動の関連を検討したところ，AT のネガティブな側面と曖昧性忌避に関連が見られた。また，曖昧さに対し好悪の評価をせず，受容する者は，曖昧さの程度をより弁別していることが示された。

現代社会は環境の変化が速く，これまで，経験したことのない全く新しい状況において，判断や選択を迫られることもあれば，判断をするための大量の情報はあるけれども，そのどれが正しいのかわからない，その中で人々は困難な判断，選択をしていかなくてはならない。現代社会は選択の難しい時代であり，それは言い換えれば，曖昧性の高い社会と言える。今後，今以上に高齢社会になれば，日本には多くの外国人労働者が入ってくるであろう。また，グローバル化の流れの中で，日本人も今後は，留学や海外勤務など海外で生活する者が増えるであろう。好むと好まざるとに関わらず，異文化接触の機会にさらされる。そのような時に，私たちのATは試されることになる。異文化接触に限らず，明日，何が起こるかわからない不確実性の高い現代において，ATは個人の曖昧さに対する反応を予測する有用な概念であり，今後も研究が蓄積されていくであろう。本論文が，AT研究のさらなる発展のための一助となることを望む。

＜引用・参考文献＞

Block, J., & Block, J. (1951). AN INVESTIGATION OF THE RELATIONSHIP BETWEEN INTOLERANCE OF AMBIGUITY AND ETHNOCENTRISM. *Journal of Personality,* 19(3), 303-311.

Budner, S. (1962) Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, 30, 29–50.

Einhorn, H. J., & Hogarth, R. M. (1986). DECISION-MAKING UNDER AMBIGUITY. *Journal of Business,* 59(4), 225-250.

Ellsberg, D. (1961). RISK, AMBIGUITY, AND THE SAVAGE AXIOMS. *Quarterly Journal of Economics*, 75(4), 643-669.

Foxman, P.(1976) Tolerance for Ambiguity and Self-Actualization. *Journal of Personality Assessment*, 40 Issue 1, 67-72.

Frenkel-Brunswik, E. (1949) Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality*, 18, 108–143.

藤田裕子(2008)「外国語学習スタイル尺度の作成とその検討」『桜美林言語教育論叢』4 43-55.

Furnham, A. (1994). A content, correlational and factor analytic study of four tolerance of ambiguity questionnaires. *Personality and Individual Differences*, 16(3), 403-410.

Furnham, A.& Ribchester, T.(1995) Tolerance of ambiguity: A review of the concept, its measurement and applications. *Current Psychology*,14, 179-199.

Gellere, G., Faden, R., & Levine, D. (1990). Tolerance for ambiguity among medical students. *Social Science and Medicine*, 31, 619-629.

Glover, J., Romero, P., & Petersen, C. (1978). Effects of a simulation game upon tolerance for ambiguity, dogmatism and risk taking. *Journal of Social Psychology*, 105, 291-296.

広田すみれ・増田真也,・坂上貴之（2006）.『心理学が描くリスクの世界 ： 行動的意思決定入門　改訂版』　慶應義塾大学出版会

今川民雄（1981）「Ambiguity Tolerance Scale の構成(1)： 項目分析と信頼性について」『北海道教育大学紀要. 第一部. C, 教育科学編』32 No.1　79-93.

Jones, M. B. (1955). AUTHORITARIANISM AND INTOLERANCE OF FLUCTUATION. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, **50**(1), 125-126.

Kenny, D., & Ginsberg, R. (1985). The specificity of intolerance of ambiguity measures. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **56**, 300-304.

Kirton, M. J.(1981) A Reanalysis of Two Scales of Tolerance of Ambiguity, *Journal of Personality Assessment*, **45**, 407 - 414.

Lazarus,R.S. and Folkman,S. (1984). Stress, Appraisal, and Coping. New York: Springer. (ラザルス, R.S. ・フォルクマン, S. 本明寛・春木豊・織田正美監訳). (1991). ストレスの心理学：認知的評価と対処の研究　実務教育出版

Levitt E. E. (1953) Studies in Intolerance of Ambiguity: I. The Decision-Location Test with Grade School Children *Child Development,* **24**, 263-268.

増田真也（1998）「曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響」『茨城大学教育学部紀要』**47**, 151-163.

増田真也・坂上貴之・広田すみれ. (2002). 選択の機会が曖昧性忌避に与える影響 ： 異なる種類の曖昧性での検討. 『心理学研究』 **73**(1), 34-41.

Millon, T. (1957) Authoritarianism, intolerance of ambiguity and rigidity under ego- and task-involving conditions. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **99**, 29-33.

文部科学省(2011). 「国際交流・協力の充実」『平成 22 年度文部科学白書』
<http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201001/detail/1312553.htm>
（2011 年 12 月 3 日）

村上幸史(2002) 「測定尺度としての「運資源ビリーフ」:レビューとその展望」『対人社会心理学研究』 **2**, 119-128.

西村佐彩子 (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討 ： 曖昧性耐性との比較を通して. 『パーソナリティ研究』**15**(2), 183-194.

Norton, R. (1975). Measurement of ambiguity tolerance. *Journal of Personality Assessment*, **39**, 607-619.

O'Connor, P. (1952). Ethnocentrism, 'intolerance of ambiguity,' and abstract reasoning ability. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**(2) , 526-530.

Pawlicki, R. E., & Almquist, C. (1973) Authoritarianism, locus of control, and tolerance of ambiguity as reflected in membership and nonmembership in a women's liberation group. *Psychological Reports,* **32**(3), 1331-1337.

Raphael, D., & Xelowski, H. (1981). Adolescents' anxiety and intolerance of ambiguity scores as predictors of dropping-out of a study. *Psychological Reports,* **48**(1), 229-230.

Rotter, N. G., & O'Connell, A. N. (1982). The relationships among sex-role orientation, cognitive complexity, and tolerance for ambiguity. *Sex Roles*, **8**(12), 1209-1220.

Ruben, B.D (1976) Assessing Communication Competency for Intercultural Adaptation. *Group & Organization Management*, **1**, No. 3, 334-354.

Sherman, R. (1974). PSYCHOLOGICAL DIFFERENCE BETWEEN AMBIGUITY AND RISK. *Quarterly Journal of Economics,* **88** (1), 166-169.

繁桝算男（1988）「あいまいさの認知における合理性」『行動計量学』**16**(1), 39－48.

Tatzel, M.(1980) Tolerance for Ambiguity in Adult College Students, *Psychological Reports* **47** 377-378.

友野隆成・橋本 宰(2002)「あいまいさへの非寛容がストレス事象の認知的評価及びコーピングに与える影響」『性格心理学研究』**11**, 24-30.

友野隆成・橋本　宰（2005a）「改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み」『パーソナリティ研究』**13**, 220–230.

友野隆成・橋本　宰（2005b)「対人場面におけるあいまいさへの非寛容が新入生の適応過程に及ぼす影響」『パーソナリティ研究』 **14**,132-134.

友野隆成・橋本　宰（2006)「対人場面におけるあいまいさへの非寛容と精神的健康の関連性について」『心理学研究』**77**, 253-260.

植村善太郎（1999)「内集団・外集団カテゴリー化とあいまいさへの耐性が異質な新参者への受容反応に及ぼす効果」『名古屋大學教育學部紀要』**46**, 187-195.

植村善太郎（2001)「あいまいさへの耐性と集団同一性が新入成員への寛容的反応に及ぼす効果」『性格心理学研究』**10**, 27-34.

White, R. P., & Shullman, S. L. (2010). Acceptance of uncertainty as an indicator of effective leadership. Consulting Psychology Journal: Practice and Research, 62(2), 94-104.

Yakhnich, L., & Ben-Zur, H. (2008). Personal Resources, Appraisal, and Coping in the Adaptation Process of Immigrants From the Former Soviet Union. *American Journal of Orthopsychiatry,* **78**, 152-162.

山岸みどり・井下理・渡辺文夫(1992)「「異文化間能力」測定の試み」『現代のエスプリ』 299 pp.201-214

八代京子・樋口容視子・コミサロフ 喜美・荒木 晶子・山本 志都(2001)『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社

吉川茂(1986)　曖昧さへのトレランスーイントレランスの基本的相違点に関する研究.『人文論究』**35**, 94-121.

米田晃久(2008)『チューター制度による留学生支援－支援の現状とチューターに求められる資質－』, 神戸大学大学院総合人間科学研究科修士論文（未公刊）

Zaccaro, S. J. (2007). Trait-based perspectives of leadership. *American Psychologist,* **62**, 6-16.

Zenasni, F., Besancon, M., & Lubart, T. (2008). Creativity and tolerance of ambiguity: An empirical study *Journal of Creative Behavior,* **42**, 61-73.

＜資料＞

留学生との交流に関する調査

この調査は日本人学生と留学生の交流について調べようとするものです。結果は統計的に処理し、あなた一人の回答のみを問題にしたり、公表することはありませんのでご協力おねがいします。

（調査者）神戸大学国際文化学研究科
グローバル文化専攻博士後期課程
米田　晃久
E-mail: akihi3@hotmail.com

◎あなたご自身についてお尋ねします。自分に当てはまるものを１つ選択し、該当する番号に○、（　）の中には文字や数字を入れてください。

1. 性別　　1. 男　　2. 女
2. 年齢　（　　）歳
3. 所属　（　　）学部・研究科　（　　）専攻
4. 学年　（学部・研究生・修士・博士　（　　）年生
5. 留学経験 はありますか。（複数ある場合は最も長いものについて答えてください）
   1. なし
   2. 3 か月未満　（国名：　　）
   3. 3 か月以上～6 か月未満　（国名：　　）
   4. 6 か月以上～12 か月未満　（国名：　　）
   5. 1 年以上　（国名：　　）

6. 海外での滞在経験（留学を除く）はありますか。（複数ある場合は最も長いものについて答えてください）
   1. なし
   2. 3 か月未満　（国名：　　）
   3. 3 か月以上～6 か月未満　（国名：　　）
   4. 6 か月以上～12 か月未満　（国名：　　）
   5. 1 年以上　（国名：　　）

7. 留学生交流サークルへの所属
   1. 所属している
   2. 所属していない

8. 留学生と話をすることがありますか。

1. はい　→9へ
2. いいえ　→12へ

9. 8で「はい」と答えた方への質問です。

留学生と以下のa,b,c,dの状況でどの程度、話をしていますか。番号を○で囲んでください。

＊1「まったくしていない」、2「2,3か月に1回程度」、3「1か月に1回程度」、4「2週間に1回程度」、　5「週に1回程度」、6「ほぼ毎日」とする。

a. 学内（授業と関連した状況で）　1------2------3------4------5------6
b. 学内（授業とは関連のない状況で）　1------2------3------4------5------6
c. 学外（授業と関連した状況で）　1------2------3------4------5------6
d. 学外（授業とは関連のない状況で）　1------2------3------4------5------6

10. 留学生とコミュニケーションをする際に主として使用する言語は何ですか。

1. 日本語
2. 英語
3. その他（　　語）

11. 留学生の友人がいますか

1. いる
2. いないが、作りたいと思っている
3. いないし、作りたいとも思わない

8で「はい」と答えた方は、次ページに進んでください。

12. 質問8で「いいえ」と答えた方への質問です。

留学生の友人を作りたいと思いますか。

1. はい
2. いいえ

8で「いいえ」と答えた方は、次ページに進んでください。

質問は次ページに続きます。⇒⇒⇒

＜資料＞曖昧さへの態度尺度（ATAS）

質問紙

◎あなたが普段ものごとをどのように考えたり、感じたりしやすいかについて、たずねるものです。以下の文が、自分の考え方や感じ方にどの程度あてはまるかを、「1 全くあてはまらない」～「6 非常にあてはまる」のうち、自分にあてはまると思う数字１つに○をつけて下さい。あまり考え込まずに答えていって下さい。

＊参考に下位尺度の分類を示した。
享受：曖昧さの享受
不安：曖昧さへの不安
受容：曖昧さの受容
統制：曖昧さの統制
排除：曖昧さの排除

		全くあてはまらない	かなりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	かなりあてはまる	非常にあてはまる	下位尺度
1.	いくつかの解釈ができると、視野や可能性が広がっていくのでおもしろい。	1	2	3	4	5	6	享受
2.	はっきりしない状況におかれると不安になる。	1	2	3	4	5	6	不安
3.	不完全なところも、ある程度受け入れられる。	1	2	3	4	5	6	受容
4.	はっきりしていないことがあっても、そのままにしておくのがいい。	1	2	3	4	5	6	受容
5.	一貫していないことには信頼がおけない。	1	2	3	4	5	6	統制
6.	見たことがないものには想像力をかきたてられる。	1	2	3	4	5	6	享受
7.	いろいろな可能性があると、すべてを試してみたくなる。	1	2	3	4	5	6	享受
8.	どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ。	1	2	3	4	5	6	排除
9.	見たことがないものは見ておくにこしたことはないので、ぜひ見てみたい。	1	2	3	4	5	6	享受
10.	情報がたりないと正確な判断はできない。	1	2	3	4	5	6	統制
11.	はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある。	1	2	3	4	5	6	受容
12.	不完全なことがあるからおもしろい。	1	2	3	4	5	6	受容
13.	いろいろな可能性があると、選ぶのに時間がかかって迷う。	1	2	3	4	5	6	不安
14.	不完全なことは、完全にしていくプロセスがあっておもしろい。	1	2	3	4	5	6	享受
15.	見たことがないものに出会うと怖くなる。	1	2	3	4	5	6	不安
16.	情報がたりないと動きづらいので、できるだけ情報を集めたい。	1	2	3	4	5	6	統制
17.	不完全なままにしておいた方がよい時もある。	1	2	3	4	5	6	受容
18.	どっちつかずであることはよくないと思う。	1	2	3	4	5	6	排除
19.	いろいろな可能性がある時には、さまざまなことを考慮して対処法を考えておきたい。	1	2	3	4	5	6	統制
20.	いくつかの解釈ができると、いろいろな角度からものごとを見られる点では自由な感じがする。	1	2	3	4	5	6	享受
21.	はっきりしないことはできるだけ白黒つけたい。	1	2	3	4	5	6	排除
22.	いろいろな可能性があると選べるのでうれしい。	1	2	3	4	5	6	享受
23.	見たことがないものにすぐに近寄るのは抵抗がある。	1	2	3	4	5	6	不安
24.	はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる。	1	2	3	4	5	6	不安
25.	情報が多すぎると、かえって頭が混乱してしまう。	1	2	3	4	5	6	不安
26.	確実でないところは確認して明らかにしたい。	1	2	3	4	5	6	統制

＜資料＞対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度(IIAS-R)

◎以下の各項目について、あなたはどの程度同意しますか。あてはまる数字（「1. 全く同意しない」～「7. とても強く同意する」）1つに〇印をつけて下さい。

＊参考に下位尺度の分類を示した。
初対面：初対面の関係における曖昧さへの非寛容
半見知り：半見知りの関係における曖昧さへの非寛容
友人：友人関係における曖昧さへの非寛容

		全く同意しない	かなり同意しない	あまり同意しない	どちらでもない	やや同意する	かなり同意する	とても強く同意する	下位尺度
1.	見ず知らずの人と一緒にいる時、私に対してどのように振舞うのか予想がつかないと、とまどってしまいます。	1	2	3	4	5	6	7	初対面
2.	あいさつぐらいしかしない人をその日、二度目に見かけた時、どう接してよいのかわかりません。	1	2	3	4	5	6	7	半見知り
3.	隣人と出会った時、お互い顔は知っているのに、あいさつしてよいのかどうか迷います。	1	2	3	4	5	6	7	半見知り
4.	友達の買い物に付き合って物を選ぶ時は、何が欲しいのかはっきりして欲しいです。	1	2	3	4	5	6	7	友人
5.	私に対する人物評が、私の親友達の間で対立する時は、とても困ります。	1	2	3	4	5	6	7	友人
6.	友達の友達に会った時、どうすべきか迷います。	1	2	3	4	5	6	7	初対面
7.	初対面の人に、どの程度親しく接してよいのかとまどいます。	1	2	3	4	5	6	7	初対面
8.	初対面の人と、お互いを探り合いながら話します。	1	2	3	4	5	6	7	初対面
9.	表面上の付き合いにとどまっている人との会話は、どこかお互いに本音を出すまいとしていて、中身がないので苦痛です。	1	2	3	4	5	6	7	半見知り
10.	初対面の人とするあいさつは、あいまいで困ります。	1	2	3	4	5	6	7	初対面
11.	中途半端に親しい友人の発言は、はっきりしないことが多いので困ります。	1	2	3	4	5	6	7	半見知り
12.	初対面の人と2人きりでいる時、話をするべきかどうか、とまどいます。	1	2	3	4	5	6	7	初対面
13.	がさつな友人は、いつもこちらに対する行動の意図がわからないので、はっきりして欲しいです。	1	2	3	4	5	6	7	友人
14.	「知人」程度の人と出会うと、お互い気付かないフリをしてしまい気まずいです。	1	2	3	4	5	6	7	半見知り
15.	友人が私の側にいて携帯電話で話していると、私はその話の内容が気になります。	1	2	3	4	5	6	7	友人
16.	昔の知人とあいさつをかわすのは、緊張します。	1	2	3	4	5	6	7	半見知り
17.	たまにしか会わない友人が、こちらの情報をどの程度持っているか気になります。	1	2	3	4	5	6	7	友人

＊質問は以上です。ご協力ありがとうございました。
後日、留学生との交流について詳細をお尋ねする場合があります。ご協力いただける方は氏名・連絡先（E-mailアドレス）のご記入をお願いします。

氏名：　　E-mail:

大学生の日常生活に関する調査

この調査は大学生の日頃の行動や考え方について調べようとするものです。結果は統計的に処理し、あなた一人の回答のみを問題にしたり、公表することはありませんのでご協力お願いします。

（調査者）神戸大学大学院国際文化学研究科
グローバル文化専攻博士後期課程
米田　晃久
E-mail: akihi3@hotmail.com

◎あなたご自身についてお尋ねします。自分に当てはまるものを１つ選択し、該当する番号に○、（　　）の中には文字や数字を入れてください。

1. 性別　　１　男　　２　女
2. 年齢　（　　）　歳
3. 所属　（　　）　学部・研究科
4. 学年　（学部　・　研究生　・　修士　・　博士）　（　　）年
5. 留学経験 はありますか。（複数ある場合は最も長いものについて答えてください）
   １　なし
   ２　3か月未満　（国名：　　）
   ３　3か月以上～6か月未満　（国名：　　）
   ４　6か月以上～12か月未満　（国名：　　）
   ５　1年以上　（国名：　　）
6. 海外での滞在経験（留学を除く）はありますか。（複数ある場合は最も長いものについて答えてください）
   １　なし
   ２　3か月未満　（国名：　　）
   ３　3か月以上～6か月未満　（国名：　　）
   ４　6か月以上～12か月未満　（国名：　　）
   ５　1年以上　（国名：　　）

◎あなたの留学生との交流についてお尋ねします。自分に最も当てはまるものを1つ選択し、その番号に○をつけてください。（　）の中には文字を入れてください。

7. 留学生と以下の状況でどの程度、話していますか。番号を○で囲んでください。
   １「まったくしていない」２「1ヶ月に1回」、３「2週間に1回」、４「週に1回」
   ５「週に2，3回」、６「ほぼ毎日」とする。

   a　授業中　1----2----3----4----5----6
   b　授業外（学内）　1----2----3----4----5----6
   c　授業外（学外）　1----2----3----4----5----6

8. **留学生とコミュニケーションをする際に主として使用する言語は何ですか。**
   １　日本語　　２　英語　　３　その他（　　語）

9. **留学生の友人がいますか。**
   １　いる
   ２　いないが、作りたいと思っている
   ３　いない、作りたいと思わない

◎以下の質問をよく読んで、（　　）には数字を記入し、該当するものには○をつけてください。

10. 2個の玉が入っている壺から1個だけ玉を取り出します。赤玉を取り出せば1万円獲得できるゲームです。次の２つの壺があります。

壺A：	赤玉1個と白玉1個からなる2個の玉が入っている。
壺B：	赤玉、白玉の個数はわからず，合わせて2個の玉が入っている。

①参加費を払ってゲームをするとしたら、どちらの壺でゲームがしたいですか。

（　壺A　or　壺B　）

②両方のゲームに参加するとしたら、**それぞれ、**いくらまで参加費を出せますか。

壺A：（¥　　）　壺B：（¥　　）

11. 100個の玉が入っている壺から1個だけ玉を取り出します。赤玉を取り出せば1万円獲得できるゲームです。次の２つの壺があります。

壺A：	赤玉50個と白玉50個からなる100個の玉が入っている。
壺B：	赤玉、白玉の個数はわからず，合わせて100個の玉が入っている。

①参加費を払ってゲームをするとしたら、どちらの壺でゲームがしたいですか。

（　壺A　or　壺B　）

②両方のゲームに参加するとしたら、**それぞれ、**いくらまで参加費を出せますか。

壺A：（¥　　）　壺B：（¥　　）

12. ある壺の中に赤玉が30個あります。さらに黒玉と黄玉が合わせて60個あります。この中から玉を一つだけ取り出します。当たりだと1万円獲得できます。

①参加費を払ってゲームをするとしたら、どちらの条件でゲームをしますか。

条件1：	赤玉を取り出せば1万円もらえる。
条件2：	黒玉を取り出せば1万円もらえる。

（　条件１　or　条件２　）

②もし、両方のゲームに参加するとしたら、条件１、条件２、**それぞれ、**いくらまで参加費を出せますか。

条件１：（¥　　）　条件２：（¥　　）

③参加費を払ってゲームをするとしたら、どちらの条件でゲームをしますか。

条件3：	赤玉か黄玉を取り出せば1万円もらえる。
条件4：	黒玉か黄玉を取り出せば1万円もらえる。

（　条件３　or　条件４　）

④もし、両方のゲームに参加するとしたら、条件３、条件４、**それぞれ、**いくらまで参加費を出せますか。

条件３：（¥　　）　条件４：（¥　　）

13. 1000個の玉が入っている壺から1個だけ玉を取り出します。「231」と書かれた玉を取り出せば1万円獲得できるゲームです。以下の2つの壺のどちらかでゲームをする時、あなたはどちらの壺でゲームをしますか。

壺A：	壺の中の玉には1～1000まで1つずつ数字が書かれている。
壺B：	壺の中の玉には1～1000までの数字のどれかがいくつ書いてあるかわからない。

（　壺A　or　壺B　）

質問は裏に続きます⇒

◎あなたが普段ものごとをどのように考えたり、感じたりしやすいかについて、たずねるものです。以下の文が、自分の考え方や感じ方にどの程度あてはまるかを、「1 全くあてはまらない」～「6 非常にあてはまる」のうち、自分にあてはまると思う数字１つに○をつけて下さい。あまり考え込まずに答えていって下さい。

		全くあてはまらない	かなりあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	かなりあてはまる	非常にあてはまる
1.	いくつかの解釈ができると、視野や可能性が広がっていくのでおもしろい。	1	2	3	4	5	6
2.	はっきりしない状況におかれると不安になる。	1	2	3	4	5	6
3.	不完全なところも、ある程度受け入れられる。	1	2	3	4	5	6
4.	はっきりしていないことがあっても、そのままにしておくのがいい。	1	2	3	4	5	6
5.	一貫していないことには信頼がおけない。	1	2	3	4	5	6
6.	見たことがないものには想像力をかきたてられる。	1	2	3	4	5	6
7.	いろんな可能性があると、すべてを試してみたくなる。	1	2	3	4	5	6
8.	どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ。	1	2	3	4	5	6
9.	見たことがないものは見ておくにこしたことはないので、ぜひ見てみたい。	1	2	3	4	5	6
10.	情報がたりないと正確な判断はできない。	1	2	3	4	5	6
11.	はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある。	1	2	3	4	5	6
12.	不完全なことがあるからおもしろい。	1	2	3	4	5	6
13.	いろんな可能性があると、選ぶのに時間がかかって迷う。	1	2	3	4	5	6
14.	不完全なことは完全にしていくプロセスがあっておもしろい。	1	2	3	4	5	6
15.	見たことがないものに出会うと怖くなる。	1	2	3	4	5	6
16.	情報がたりないと動きづらいので、できるだけ情報を集めたい。	1	2	3	4	5	6
17.	不完全なままにしておいた方がよい時もある。	1	2	3	4	5	6
18.	どっちつかずであることはよくないと思う。	1	2	3	4	5	6
19.	いろんな可能性がある時には、さまざまなことを考慮して対処法を考えておきたい。	1	2	3	4	5	6
20.	いくつかの解釈ができると、いろんな角度からものごとを見れる点では自由な感じがする。	1	2	3	4	5	6
21.	はっきりしないことはできるだけ白黒つけたい。	1	2	3	4	5	6
22.	いろんな可能性があると選べるのでうれしい。	1	2	3	4	5	6
23.	見たことがないものにすぐに近寄るのは抵抗がある。	1	2	3	4	5	6
24.	はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる。	1	2	3	4	5	6
25.	情報が多すぎると、かえって頭が混乱してしまう。	1	2	3	4	5	6
26.	確実でないところは確認して明らかにしたい。	1	2	3	4	5	6

◎以下の各項目について、あなたはどの程度同意しますか。あてはまる数字（「1．全く同意しない」～「7．とても強く同意する」）１つに○印をつけて下さい。

		全く同意しない	かなり同意しない	あまり同意しない	どちらでもない	やや同意する	かなり同意する	とても強く同意する
1.	見ず知らずの人と一緒にいる時、私に対してどのように振舞うのか予想がつかないと、とまどってしまいます。	1	2	3	4	5	6	7
2.	あいさつぐらいしかしない人をその日、二度目に見かけた時、どう接してよいのかわかりません。	1	2	3	4	5	6	7
3.	隣人と出会った時、お互い顔は知っているのに、あいさつしてよいのかどうか迷います。	1	2	3	4	5	6	7
4.	友達の買い物に付き合って物を選ぶ時は、何が欲しいのかはっきりして欲しいです。	1	2	3	4	5	6	7
5.	私に対する人物評が、私の親友達の間で対立する時は、とても困ります。	1	2	3	4	5	6	7
6.	友達の友達に会った時、どうすべきか迷います。	1	2	3	4	5	6	7
7.	初対面の人に、どの程度親しく接してよいのかとまどいます。	1	2	3	4	5	6	7
8.	初対面の人と、お互いを探り合いながら話します。	1	2	3	4	5	6	7
9.	表面上の付き合いにとどまっている人との会話は、どこかお互いに本音を出すまいとしていて、中身がないので苦痛です。	1	2	3	4	5	6	7
10.	初対面の人とするあいさつは、あいまいで困ります。	1	2	3	4	5	6	7
11.	中途半端に親しい友人の発言は、はっきりしないことが多いので困ります。	1	2	3	4	5	6	7
12.	初対面の人と2人きりでいる時、話をするべきかどうか、とまどいます。	1	2	3	4	5	6	7
13.	がさつな友人は、いつもこちらに対する行動の意図がわからないので、はっきりして欲しいです。	1	2	3	4	5	6	7
14.	「知人」程度の人と出会うと、お互い気付かないフリをしてしまい気まずいです。	1	2	3	4	5	6	7
15.	友人が私の側にいて携帯電話で話していると、私はその話の内容が気になります。	1	2	3	4	5	6	7
16.	昔の知人とあいさつをかわすのは、緊張します。	1	2	3	4	5	6	7
17.	たまにしか会わない友人が、こちらの情報をどの程度持っているか気になります。	1	2	3	4	5	6	7

＊質問は以上です。ご協力ありがとうございました。
後日、追加でいくつかお尋ねする場合があります。 ご協力いただける方は氏名・連絡先（E-mailアドレス）のご記入をお願いします。

氏名：　　E-mail:

謝辞

本論文は筆者が神戸大学大学院国際文化学研究科グローバル文化専攻博士後期課程在籍中に行った研究成果をまとめたものです。本研究をまとめるにあたって，多くの方々のご指導，ご支援，ご協力を頂きました。同専攻教授，宇津木成介先生には博士前期課程から，長年に渡り，指導教官として，本研究のあらゆる局面において，常に親身にご指導を頂きました。ここに深謝の意を表します。同専攻教授，米谷淳先生には副査として，論文の方向性に関して，重要なご助言頂きました。同専攻教授，水野マリ子先生にも副査として日本語教育の観点から，本研究と現実場面とをつなぐ有益なご助言を頂きました。副査の先生お二人にも，前期課程からご指導を頂きました。先生方には，長きに渡り，研究に関する指導を含め，いつも暖かく見守っていただきました。ここに心より感謝の意を表します。同専攻教授，水口志乃扶先生，定延利之先生，同専攻准教授，林良子先生，松本絵里子先生には，論文の中間報告会，学位論文コロキアムにおいて，いつも有益なご助言を頂きました。ここに感謝を申し上げます。

本論文の調査にあたり，山口県立大学国際文化学部文化創造学科准教授，古別府ひづる先生には，大変ご尽力頂きました。心よりお礼申し上げます。宇津木研究室の先輩である渡部留美さん，鈴木智草さん，呉映研さんには，論文執筆にあたりアドバイスを頂き，調査協力もして頂きました。ここにお礼申し上げます。また，同じ感性コミュニケーションコースの院生のみなさんには，いろいろお世話になりました。専門分野はそれぞれ違いますが，折に触れ，お互いの研究についてコメントを交わしたことは，良い刺激となりました。ありがとうございました。特に同コースの嘉幡貴至君は，博士前期課程を含め，6 年に渡り，院生生活の苦楽を共にしました。彼との雑談は，研究生活において，一服の清涼剤となりました。彼との出会いに感謝したいです。ここに名前を全て挙げることはできませんが，貴重な時間を割き，調査に協力していただいた方々に感謝申し上げます。

本研究の端緒は，どのような人が，外国人とうまくコミュニケーションができるのだろ

う，うまくやってそうな人たちには，何か共通性があるような気がするが，それは何だろう，そんなぼんやりとした疑問です。背景がよくわからない相手とコミュニケーションをすることは，多くの場合，簡単ではないし，必ずしも心地よいものではありません。それでも，粘り強くコミュニケーションができる人が，外国人とうまくやっていける人ではないだろうかと考え，そのような人間が持つ特性を説明するものは何であろうと探す中，結果として Tolerance of Ambiguity にたどり着きました。それが，博士課程前期の頃の話です。研究を進めるうちに，Tolerance of Ambiguity もずいぶん，曖昧な概念であることに気づいていくことになりました。思い返せば修士論文，博士論文の研究，執筆は常に曖昧な状況だったように思えてきます。おそらく，研究とは，その性質上，曖昧さを含んでいて，それを明確にする作業と言うこともできるのではないかと思います。明確にしていく作業の成果がこの博士論文です。本論文においてすべてが明確になったわけではありませんが，曖昧模糊としていた Tolerance of Ambiguity の一端が明らかになったと考えています。

最後に，何をやっているかよくわからない曖昧な息子の研究生活を見守ってくれた両親に感謝します。惜しむらくは，最も私の将来を期待し，心配していた母に，完成した論文を見せられなかったことです。それでも，どこかで，きっと喜んでいるのではないかと思っています。